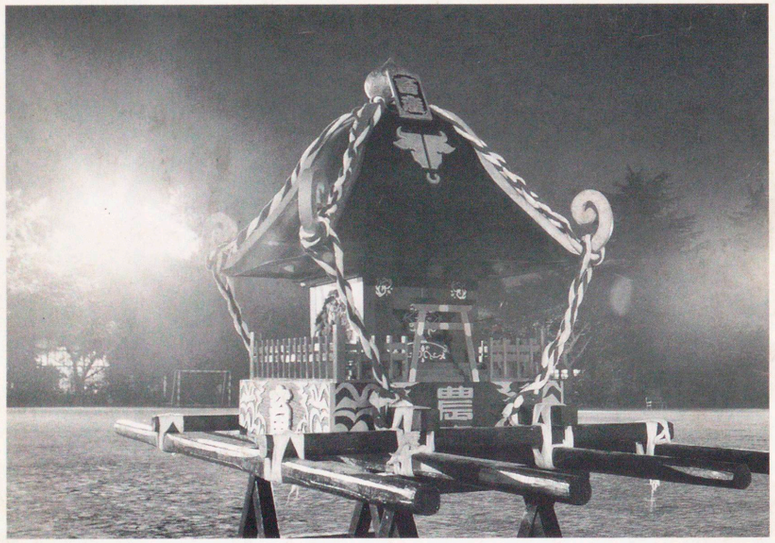
ふじみの



No.38

東京農大畜友会

巻頭言

畜産学科長
畜友会会長　大谷　忠

卒業生のみなさんこの度は誠におめでとうございます。

皆さんは四年前に新設されたこの厚木キャンパスに、最初に入学し、最初に卒業された方々です。当初は設備も十分に整っていなかったにもかかわらず、畜産の領域をよく学び、充分な力をつけられたことに感心する次第です。また、学友同士の団結力も強く、研究室を超えた相互のふれあい、助け合いの姿は本当に素晴らしいものでした。このようなことが第一、二回厚木キャンパス収穫祭の成功にも繋がっていったのだと思います。卒業後も是非この力を発揮して社会においても頑張って頂きたい。

さて、厳しい難関を乗り越えて農学の道を歩もうとしている新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんはそれぞれが目的意識を持って、畜産の世界に入ったのですから、講義の内容をよく調べ、先輩の話などを聞いて、自分の進む道を出来るだけ早く確認して下さい。

昨年のアメリカで起こった同時多発テロ事件で、日本の経済は影響を受け、低迷が続いておりますが、これに追い打ちをかけるように、日本で初めての狂牛病（牛海綿状脳症）が発生し、日本の畜産界でも一昨年の口蹄疫騒ぎの動揺が治まらないまま大打撃を受けています。農学の分野は食料、環境、エネルギー、健康などについて学ぶところですが、畜産の領域にこの様な大きな問題が発生していますので、この解決には若い皆さんの力と勉学そしてその成果にかかっております。また、これは農大で学び、そして学んだあなた方の知識を充分活かすチャンスであると思います。

終わりに当たり、本誌において数々の原稿をお寄せいただき、また、編集の労をとられた関係各位に感謝の意を表します。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　関　克　史

新芽の和らぐ今日このごろ、厚木キャンパスも春の光がうららかな季節となりました。今年も「ふじみの」第三十八号を発刊することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載すると共に、昨年一年間の事業報告等を記載しています。今年は厚木キャンパスで学んできた学生が初めて一年生から四年生まで揃い、東京農業大学「厚木キャンパス」としての形というものが見えてきたように思います。まだまだ新しく変化しつつありますが、その中で学生一人一人が感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章が載せられています。是非、隅々までご覧いただけたら幸いです。

ふじみの

目　次

巻頭言

ふじみの発刊にあたり　大谷　忠

同窓会だより

関　克史

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会　便り　伊藤　澄麿

研究室だより

家畜繁殖学研究室
家畜飼養学研究室
家畜学研究室
畜産物利用学研究室
家畜育種学研究室
家畜生理学研究室
家畜衛生学研究室
野生動物学研究室

渡邉　誠喜

退職にあたり

轍（わだち）　野生動物学研究室のあゆみ　渡邉　誠喜
吉行　端子

ふじみの寄稿原稿

東京農業大学に赴任して　渡邊　乾二
未来に向けて　半澤　恵
若者と技術力　安藤　元一
『大切なこと』を思い出す　桑山　岳人
きっかけとなった沖縄出張

集う学友

一年生になったら　4年　齋藤　常浩
農大娘。　4年　鈴木　明子
タイでの一ヶ月　3年　松本　明子
大学生活　3年　山本　美和
FIGHTINGRADISH！　2年　本間　彩子
愛する仲間たち　1年　山田　敦志

畜友会だより

平成十三年度畜友会事業報告
平成十二年度畜友会決算報告
特別会計収支報告
平成十三年度畜友会予算
特別会計予算
平成十三年度畜友会役員
第二回厚木キャンパス収穫祭・
第一一〇回体育祭事業報告及び結果報告
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第二回厚木キャンパス収穫祭・第一一〇回体育祭各部門委員長より

らしく　統一本部委員長　3年　関　克史
エンターテイメント　特別企画委員長　3年　林　洋子
みんなあっての「宣伝隊」　宣伝隊隊長　3年　正木　美舟
楽しいお神輿作り　神輿隊長　3年　須藤　稔太
愚痴と反省　体育祭委員長　3年　吉田　博幸
櫓装飾　櫓装飾委員長　3年　大林　通子
宝　物　研究棟アート委員長　3年　八木真友美
家畜苑について　家畜苑委員長　3年　立川　悠々

編集後記

3年　宮國　科子

同窓会だより

同窓会長あいさつ

畜産学科同窓会
会長　伊　藤　澄　麿

畜産学科は、昭和二十四年に千葉県茂原において千葉農学部畜産学科として設置され、昭和二十八年に第一回の卒業生を世に出して以来、今日（平成十二年度・第四十九回）までに、延べ六、三七五名の同窓生が、国の内外を問わず、畜産業ならびに関連産業界においてそれぞれ活躍されております。

畜産学科同窓会は、畜産学科の創立四十周年を迎えるに当たり、昭和六十三年十一月に設立されました。その目的は、会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することであります。会員の皆様のご協力により着々と左記のような事業を展開しています。

一、畜産学科への援助
二、新入会員および卒業祝賀会への援助
三、会員名簿の追補版の発行
四、同窓会報の発行
五、総会および親睦会の開催
六、役員会および常任幹事会の開催

特に、昨年度は厚木キャンパスへの移転の年であったことから畜産学科の変遷や新たに開学した厚木キャンパスの紹介を兼ねた「同窓会報第四号」を発行し、会員の皆様に発送いたしました。また、本年度は厚木キャンパスで始めて総会を開催し多くの同窓生が参集され楽しいひと時を過ごしました。

四年生の諸君は、卒業と同時に同窓会の会員となられる訳であります。どうか、畜産学科で学び成長されたことを生涯の絆として各界で活躍されることをお祈りします。また、同窓生諸氏の連携を密にされ、親睦などを図るケルンとして同窓会を活用していただきたいと思います。

準会員というべき新入生・在校生は、「同窓会」を多いに活用され、その恩恵を受けていただき、勉学ならびに課外活動に全力投球され幅広い人格を形成され悔いのない学生生活を送ってください。

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会　便り

東京農業大学畜産振興会
会長　渡　邉　誠　喜

東京農業大学畜産振興会が発足して、丁度十年になります。そこでこの畜産振興会の発足の経緯やこれまで行ってきた諸々の事業についてご紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可をえて設立されたものであります。会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたる一方、役員以外の評議員によって評議委員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることとなっております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生としての採用が毎年二～四年次生の各学年から一名ずつ三名、姉妹校への留学生並びに派米農業実習生に交通費の一部を支給し、優秀卒業論文賞が毎年一名、さらに関連学会誌へ学術論文が掲載、または学会で論文を口頭発表した学生に対して、それぞれ表彰しております。近年、社会の経済不況により学費納入が困難な学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与を行っています。また、学生による論文発表や学会での口頭発表が増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本振興会の意義が高まってきております。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開校し、畜産学科が移転しましたが、教員は世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみという期間が三ケ年間あったので、学生の教材提供の意味から初年度は乳用子牛雌一頭、二年目にはリャマ雌一頭、雄一頭、そして三年目には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、それぞれが大きく成長し、寄贈第一号はすでに子牛を出産し、牛乳を生産している傍ら、学生の卒業論文の材料として活用されております。

従来の事業実績をまとめてみますと、

卒業論文賞　（敬称　略）
平成三年度：近藤美香
平成四年度：斉藤美奈子
平成五年度：川田陽一
平成六年度：西尾直
平成七年度：松下かおり

平成八年度：関根さわらび
平成九年度：小池義文
平成十年度：熊上秀幸・橋本和彰
平成十一年度：北風孝広
平成十二年度：小高露美（合計七名）。

成績優秀奨学生
平成三年度（該当者なし）、平成四年度（該当者なし）、平成五年度（五名）、平成六年度（二名）、平成七年度（該当者なし）、平成八年度（三名）、平成九年度（三名）、平成十年度（三名）、平成十一年度（三名）、平成十二年度（四名）、合計二十三名。

姉妹校への留学並びに派米農業実習
平成五年度（一名・〇名）、平成七年度（一名・二名）、平成十一年度（〇件・一名）、合計（二名・三名）。

関連学会誌並びに学会口頭発表
平成九年度（二件・三件）、平成十年度（〇件・八件）、平成十一年度（〇件・五件）、平成十二年度（〇件・六件）、合計（二件・二十二件）となりました。

本会設立の契機は振興会会誌創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜ったことによります。その後、本会の原資は畜産学科同窓会からの寄付金、賛助会員会費、一般寄付、その他の収入によって賄われています。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念いたします。また、卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のためご支援を賜りたくお願いたし、振興会便りといたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

私達、家畜繁殖学研究室は、家畜・家禽の効率的な繁殖方法の追求を目標とし、百目鬼郁夫教授をはじめに、門司恭典助教授、佐藤光夫講師、小川博講師、桑山岳人講師、の御指導の下、大学院生7名、4年生28名、3年生31名の室員一人一人が自覚と誇りを持ち、互いに協力し合って、それぞれの夢に向かって日々活発に取り組んでいます。

当研究室では、繁殖生理に関する研究、人工授精ならびに受精卵移植に関する研究を行っております。具体的には、生殖（受精、妊娠、分娩等）のリズムとホルモンに関する研究、繁殖行動の内分泌支配に関する研究、精子・卵子・胚の凍結保存に関する研究、体外受精等の先端技術の研究を行っており、研究室内は、自信と希望に溢れかえっています。

日常の活動内容としては、3年生は繁殖学に関する基礎的な知識や実験方法やその技術を身につけるとともに、当研究室で飼養管理しているシバヤギ、ミニチュアブタ、鶏とそれぞれの班に分かれ、日常の飼育・管理を行ない、大学院生や4年生の研究・実験補助などをしています。

年間の主な行事は、新入生歓迎会、年2回の納会並びに大掃除、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、毎週行なわれるゼミ等があります。

今後も、当研究室では、目標に一歩でも近づけるよう、これからの繁研生活を爆進していきたいと思っていますので、これからも宜しくお願いいたします。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
青柳　啓	卵巣割去したミニチュアブタにおける安息香酸エストラジオール投与後の血中エストロジェン濃度の推移	門司　桑山
秋山　佳子	発生初期胚へのエストロジェン投与が雄ニホンウズラの性行動に及ぼす影響	桑山　門司
有村　君子	岐阜地鶏の雌のストレスに対する反応性	桑山　門司
飯田　京	雄ニホンウズラの血中テストステロン濃度の日内変動	桑山　門司
井上　真光	ミニチュアブタにおける活性持続型	百目鬼

PGF2αを用いた発情周期の同期化　門司

江口　春菜　雌シバヤギにおける糞中性ステロイドホルモンの測定法の検討　百目鬼　桑山

川畠　和巳　ミニチュアブタにおける採血後の血漿分離条件が血中性ステロイドホルモン濃度の及ぼす影響　百目鬼　門司

川部　浩一　妊娠期におけるDES投与がミニチュアブタ母体の血中性ステロイドホルモンに及ぼす影響　門司　桑山

楠　香織　シバヤギの培養精巣細胞の性ステロイド合成に及ぼすDES添加の影響　門司　百目鬼

小石　広幸　シバヤギにおけるFSH製剤を用いた多排卵誘起処置法の検討　百目鬼　門司

國分　京子　シバヤギにおけるPGF2αおよびPGF2α阻害剤投与による分娩時期の制御　百目鬼　門司

小林　聡子　シバヤギの造精機能に及ぼす5α-リダクターゼ阻害剤投与の影響　百目鬼　門司

佐久間志乃　ストロー法によるブタ凍結精液用の希釈液の検討　門司　佐藤

島崎　恵　ウシにおける発情、妊娠および分娩に伴う体液中NAGase活性の変動について　佐藤　門司

白坂　浩祐　抱卵行動終結前後の母鶏の卵巣機能の変化について　桑山　小川

菅原　豊　雄ミニチュアブタにおけるACTH製剤投与後の血中性ホルモン濃度の推移　百目鬼　桑山

杉野　幸代　ミニチュアブタにおける安息香酸エストラジオール投与が母体および産子の生殖器に及ぼす影響　門司　桑山

谷川　麻耶　ミニチュアブタにおけるビスフェノールA投与後の血中動態と胎児への移行および残留性　百目鬼　門司

中島　弘貴　膣内留置型プロジェステロン製剤（CIDR）によるミニチュアブタの発情同期化　門司　百目鬼

登　健太　シバヤギの培養精巣細胞の性ステロイド合成に及ぼす5α-リダクターゼ阻害剤の影響　百目鬼　門司

濱野　岳人　膣内留置型プロジェステロン製剤（CIDR）によるシバヤギの発情同期化　門司　百目鬼

福永　洋子　夜間給餌による肉ウシの昼間分娩誘起について　佐藤　門司

森下子奈技　ミニチュアブタの造精機能に及ぼすDES投与の影響　門司　桑山

森元　宏樹　PMSG投与が鶏の卵胞急速成長に及ぼす影響　桑山　小川

諸橋　大輔　発生初期胚へのエストロジェン投与が雄ニホンウズラの生殖機能に及ぼす影響　桑山　小川

横山　貞治　鶏の産卵開始期における卵胞急速成長について　桑山　小川

渡辺　陽子　ニワトリ卵殻を用いた異種鳥胚の培養に関する研究　桑山

飯島　朋哉　ブタの体外受精における単精子受精率の向上に関する検討　門司　佐藤

家畜飼養学研究室

生産物を提供してくれる家畜、共に生活するコンパニオンアニマル、同じ水・空気を分かち合いつつも滅多に顔を会わすことがない野生動物、どの動物も生きていく上で欠かすことのできないものが、飼料・（食物）です。本研究室は動物が生きていくために、どんな飼料を（飼料学）どれくらい（動物栄養学）どうやって（家畜管理学）与えるかを常に追求しています。これらの妥当性を判断する知識として各動物の行動の意味（家畜行動学）を理解し、さらには与えた飼料の最終形態（糞尿）（畜産環境保全論）についても考えねばなりません。これら全ての知識を応用した学問が家畜飼養学です。

研究は、伊藤澄磨教授、栗原良雄教授、祐森誠司助教授の指導の下、進めており、成果は日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会、日本ペット栄養学会等の大会に毎年発表されています。研究室の活動は、春の富士農場での専攻実習と新室員歓迎会に始まり、夏の家畜管理実習（学外）、飼料成分分析実験、秋の収穫祭への参加（模擬店カレーうどん、文化学術展牛の不思議）、冬の畜産関連諸施設の見学を兼ねた研修旅行、卒論発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会と盛り沢山です。各活動を通して、室員の団結を深め、それぞれが、目的意識を持って有意義な学生生活を送っています。

研究室を第二の家のように楽しく過ごし、先生方の指導も厳しい時もありますが、学生の相談に親密に応えてくださり、厳しさの中に優しさを感じます。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
赤坂　洋一	アミノ酸添加低タンパク質飼料の給与が肥育豚に及ぼす影響　特に肥育前期の消化について	栗原　鈴木
有馬　友宏	アミノ酸添加低タンパク質飼料の給与が肥育豚に及ぼす影響　特に肥育後期の消化について	栗原　鈴木
伊藤　立	高栄養飼料の給与が食糞行動を阻止した成兎の消化に及ぼす影響	栗原　池田
氏家　伸幸	コーヒー抽出残渣の水分含量が牛糞由来臭気ガスの脱臭効果に及ぼす影響	栗原　伊藤
大石久美子	高栄養飼料の給与が食糞行動を阻止した成兎の体重ならびに飼料摂取量に及ぼす影響	栗原　池田

岸本　之佳	高温環境下の湿度がブロイラーの成長に及ぼす影響	栗原　祐森
黒沢　望	草食獣の糞にみられる非水溶性未消化物の光学的観察	伊藤　祐森
郡司　昌孝	日本養豚の現状と将来について	伊藤　栗原
齋藤　常浩	ラマにおける粗飼料の消化に関する研究	伊藤　祐森
篠原　裕佑	高温環境下の湿度がブロイラーの体組成に及ぼす影響	栗原　祐森
庄子　孝平	パックサイレージ調製時の糖添加が化学成分に及ぼす影響	栗原　池田
重良　素史	ビタミンB12の過剰給与が食糞阻止ラットの成長に及ぼす影響	祐森　池田
菅原　春恵	アミノ酸添加低タンパク質飼料の給与が肥育豚に及ぼす影響　特に肥育後期の排泄物中の化学成分について	栗原　鈴木
鈴木なぎさ	富士畜産農場圃場における牧草の収量および養分収量　二、三番草について（三年目）	栗原　池田
萩原　友子	盲腸内への抗生物質の投与がラットの含水糞形成に及ぼす影響	祐森　池田
服部　宙倫	ラマにおける飼料の嗜好性に関する研究	伊藤　祐森
藤井　貴宏	軽種馬の味覚に関する研究	伊藤　祐森
牧田　信吾	ガス分析型呼吸試験装置の性能の検討	栗原　祐森
丸尾　友明	パックサイレージ調製時の糖添加が品質に及ぼす影響	栗原　池田
本橋　勉	豚の糞尿比と臭気ガス発生の関係	栗原　池田
谷内　伸二	コーヒー抽出残渣による牛糞由来臭気ガスの脱臭方法の検討	栗原　祐森

山崎　誉平　アミノ酸添加低タンパク質飼料の給与が肥育豚に及ぼす影響　特に肥育前期の排泄物中の化学成分について　栗原　鈴木

市川　祐司　アミノ酸添加低タンパク質飼料の給与が肥育豚の成長に及ぼす影響　栗原　鈴木

五十嵐隆太　マイクロスコープによる飼料鑑定の検討　栗原　祐森

玉川　智義　畜産におけるHACCP導入について　伊藤

家畜学研究室

本研究室は、大谷忠教授をはじめ、荻原國威講師、西脇充講師の先生三名の御指導のもとに、四年次生二十八名、三年次生二十四名、計五十二名の室員で日々の研究室活動を行っています。

本研究室では、学内外の実習・調査を通し、家畜生産現場での現在の問題点や疑問点について各自が考察し、それらに係わる研究を行っておりますが、家畜・家禽・堆肥・伴侶動物など、研究内容は多岐にわたっております。

現在の主な研究課題は

・魚介類由来極性脂質が家禽に及ぼす影響に関する研究
・ダチョウの孵卵・孵化・育雛・行動等に関する研究
・乳用緬羊の管理に関する研究
・有機物資源の堆肥化と利用に関する研究
・伴侶動物に関する調査・研究

などを行っております。

その他に、年間行事として、新入生歓迎会・研修旅行・納会・月二回の定例会などと各研究班によるゼミがあります。

今年で設立五年目を迎える新しい研究室ですが、今後も各人の自主性を尊重するとともに、研究室全体の協調性も培ってゆけるよう全員で精進してまいります。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
相川淳之介	鶏用飼料添加物Fish Phosphatidyl Cholineの最適製造条件の検討	西脇
秋吉　洋典	熊本県阿蘇地区におけるあか牛の歴史と有利性	荻原
安部　健悟	ハーブ飼料給与がブロイラーの生産性に及ぼす研究	西脇
飯島　友美	グリーン・ツーリズムが日本の畜産業活性化に果たす役割 —北海道・奈良県・三重県周辺地域等を参考例として—	大谷
池田　景子	動物を飼育している公園における飼育の現状と利用者の意識	大谷
石井　学	メタン発酵装置の家畜糞尿処理プラントより排出される脱水汚泥の堆肥化に関する研究	大谷
色川　智沙	高齢者施設における動物介在活動の現状と問題点	西脇
岩井慶太郎	新鶏用飼料添加物Fish Phosphatidyl Choline及びFish Phosphatidyl Choline製造に発生するペプチド区分がブロイラーヒナに対する成長促進効果	西脇
片折　栄美	鶏用飼料添加物Fish Phosphatidyl Choline の脂質クラス組成に関する研究	西脇
鯨岡　俊行	ダチョウ肉における栄養組成に関する研究	西脇
小畑　麻実	フライランド種子羊の人口哺乳に関する研究 —早期離乳における代用乳給与日量と子羊の発育—	大谷
小林江梨子	わが国における酪農ヘルパー制度に関する研究	大谷

—調整堆肥の熟度の推移について—

—現状の問題点と対策について—

佐藤　美之　イワシから抽出した油分がヒナの成長等に及ぼす影響　西脇

渋谷　明久　乳用緬羊フライスランド種系の発育曲線に関する研究　大谷

杉田美穂子　夏季における乳牛舎の環境に関する調査　西脇

鈴木　明子　ツキノワグマ野生個体（アクトグラム）と飼育下個体との行動比較調査　大谷

高田　理恵　人口哺乳子牛の加齢に伴う吸乳速度が発育に及ぼす影響　西脇

高橋　康介　知的障害授産施設における畜産分野の現状並びに問題点と対策　大谷

滝川　泰子　宮古馬の飼育状況と今後の課題　大谷

田代　裕樹　都市近郊における酪農家の環境対策と今後の対応　萩原

田中　祐樹　ホースセラピーに用いられている馬について　西脇

豊村　和幸　ブロイラーヒナを用いた飼料中成長促進物質の短期・簡易検定法の検定　西脇

野沢　武弘　カナダの気候、地域により異なる農業の経営形態と畜産物に関する考察　大谷　久能木

橋口　祐典　メタン発行装置の家畜糞尿処理プランより排出される脱水汚泥の堆肥化に関する研究
—堆肥化中のガス発生量について—　大谷

長谷川尚輝　ダチョウ種卵の入卵時消毒方法の違いによる付着細菌数の推移　西脇

別部　耕治　ダチョウヒナへの生菌剤投与による育雛率の改善に関する検討　西脇

細川　智行　ダチョウヒナの初生時における行動に関する研究　西脇

松本　大輔　メタン発行装置の家畜糞尿処理プラントより排出される脱水汚泥の堆肥化に関する研究
—調製堆肥の肥料効果について—　大谷

横山　真美　わが国の河川敷野草地の利用に関する研究
—特に江戸川、利根川周辺について—　大谷

出町　明香　動物愛護センターの実状と意識に関する調査研究　西脇　大谷

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の山中良忠教授をはじめ、渡邊乾二嘱託教授、古川徳教授、松岡昭善教授のご指導のもとに大学院生1名、4年次生27名、3年次生26名の室員で構成されており、それぞれに活発な活動を行っています。

具体的には、乳・肉・卵中に含まれる各種成分の化学的、物理学的特質ならびに栄養、生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究し、食品成分の機能性や保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発等に取り組んでいます。

年間の主な活動としては、週1回の食品に関するゼミナール、新入生歓迎会、乳酸飲料製造実習、プリンの収穫祭での販売、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
麻生　賢一	マクロファージ殺菌能に及ぼす乳酸菌と酵母の影響	古川
荒川　友紀	粘質物生産菌を用いたヨーグルトの血圧降下作用について	古川

石川麻由美　酵母構成成分がマクロファージの活性化に及ぼす影響　古川

遠藤のぞみ　卵白オボムチン酵素分解物の腸内細菌に及ぼす影響　渡邊

笈川　志摩　PCR法による食肉の肉種鑑別　松岡

大木　修　生ハムの製造に関する基礎的研究—豚片ロース生ハムの製造—　松岡

大橋　友菜　マクロファージの活性化に及ぼす乳酸菌構成成分の影響　古川

大原　雅子　卵白オボムチン酵素分解物のヨーグルト有用微生物に対する増殖作用　渡邊

小田原宏治　ダチョウ肉タンパク質のアミノ酸組成　松岡

梶原　祥子　ケフィールスターター中の乳酸菌と酵母のMΦおよびNK細胞活性に及ぼす効果　古川

春日　孝仁　RO処理乳を用いたカマンベールチーズ製造法の検討　古川

金井　征洋　酒粕中で熟成した生ハム中の脂質組成の変化　松岡

神田　亘　化学誘発癌に及ぼすヨーグルトの影響　古川

木内　努　アイラグ様発酵乳製品製造中の乳酸菌と酵母の菌数変化とエタノール産生について　古川

河野　圭祐　ヨーグルト摂取によるラット糞便中のグルクロニダーゼ活性の変化　古川

齋藤　暁彦　イタリア産サラミソーセージから分離した乳酸菌のタンパク分解活性　松岡

鈴木　紀代　E. faeciumおよびKR4を用いたヨーロピアンタイプ発酵ソーセージの製造に関する研究　松岡

高橋久美子　E. faeciumおよびKR4を用いたアメリカンタイプ発酵ソーセージの製造に関する研究　松岡

堤　真理　フレッシュソーセージの色調安定性に及ぼす添加物の影響　松岡

橋本　美香　高血圧ラットにおけるアイラグ様発酵乳製品の血圧降下作用　古川

浜口有季子　粘質物生産菌を用いたヨーグルト製造法の検討　古川

水内　真理　カマンベールチーズの熟成に及ぼす添加物の影響　古川

矢住　博章　ダチョウ肉の脂質組成に関する研究　松岡

吉本　了　発酵豆乳およびアイラグ中の酵母の同定　古川

渡邊亜沙美　卵白オボムチン酵素分解物の乳酸菌増殖作用とその機構　渡邊

渡辺比佐江　塩漬卵の保存性について　古川

本條　暢子　酒粕中で長期間熟成した生ハムの品質　松岡

田中　暁子　マウスのナチュラルキラー細胞活性に及ぼす植物性乳酸菌の効果　天野　古川

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、血清学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、天野卓教授をはじめ、野村講師の指導の下、大学院生8名、4年生26名、3年生28名によって構成され、室員各自の自覚と互いの協力よりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては電気泳動による血液蛋白型の研究・モノクローナル抗体を用いた赤血球抗原に関する研究・在来家畜の遺伝学研究・組織適合性抗原遺伝子のDNA解析などが行われています。

研究室での日常の活動は実験動物の管理、毎週行われているセミナー、定例室員会、卒業論文などの研究、実験における問題点を解決するための討論などです。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生による、学会発表や学生による他大学や他の研究機関での研究を行っています。

研究室における主な年間行事は、新室員歓迎会、定期総会、収穫際への参加、研修旅行、特別講演会、卒論発表会などがあります。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
新井　祥子	血液蛋白型支配遺伝子からみたスイギュウの系統遺伝学的研究	野村　天野
榎本　奈	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの系統遺伝学的研究	野村　天野
柏　景子	血液蛋白型支配遺伝子からみたヤギの系統遺伝学的研究	野村　天野
菅野　雅子	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	野村　天野
最知　直美	ヤギのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	野村　天野
酒井　佑樹	血液蛋白型支配遺伝子からみたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
坂野　優介	ヤギの毛色支配遺伝子に関する研究	野村　天野
柴原佐也加	ミトコンドリアDNA情報を用いたヤギの系統遺伝学的研究	野村　天野
菅沼　靖之	遺伝子導入ベクターの作成とその利用に関する研究	天野　野村
鈴木　智	ウシ赤血球膜抗原の免疫遺伝学的研究	野村　天野
関口　友美	異種移植用ハイブリット肝臓保有動物の開発に関する研究 胚再生に関与する遺伝子の同定	天野　野村
千光士敦是	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの系統遺伝学的研究	野村　天野
滝澤　美香	ミトコンドリアDNA情報を用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
玉那覇科子	ミトコンドリアDNA情報を用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
冨山　忠信	ヤギ赤血球膜抗原の免疫遺伝学的研究	野村　天野

永山　貴子	ヤギマイクロサテライトマーカーの開発に関する研究	天野　野村
沼澤　圭治	マイクロサテライトマーカーを用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
蛭本亜由美	マウス被毛突然変異Caraculの遺伝学的解析	天野　野村
福山　貴史	ミトコンドリアDNA情報を用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
松岡裕里子	ヤギ赤血球膜抗原の免疫遺伝学的研究	野村　天野
松崎　泰久	マイクロサテライトマーカーを用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
真野　隆行	ミトコンドリアDNA情報を用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
圓木　崇義	MHCタイプを固定したヤギ系統の作製に関する研究	野村　天野
水野　肇	ウシ赤血球膜抗原の免疫遺伝学的研究	野村　天野
宗元　裕佳	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの系統遺伝学的研究	野村　天野
八尋　俊明	ミトコンドリアDNA情報を用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野
山本　悦久	ミトコンドリアDNA情報を用いたウシの系統遺伝学的研究	野村　天野

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は、渡邉誠喜教授をはじめ、半澤恵助教授、吉田豊講師、原ひろみ副助の御指導のもと、大学院生4名（うち1名がタイからの留学生）、研究生1名、学部4年次生26名、3年次生30名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理的機構の遺伝的支配に関する研究が行われており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリ・ホロホロチョウに関する研究、③ウシに関する研究、④その他の動物に関する研究、に大きく分けられます。

①においては、運動生理上の赤血球の変化、造血幹細胞の培養と培養赤血球の成熟過程、ヘモグロビン遺伝子の塩基配列の解析、癌抑制遺伝子であるp16遺伝子に関する研究などが行われています。②においては、各種家禽の組織適合性複合体(MHC)に関する分子遺伝学的・免疫学的・血清学的解析、血液型の解析、ゲノムDNA解析、製糖ケーキ（木炭粉末）のニホンウズラへの投与効果、ニホンウズラの上皮細胞培養法の確立、高温環境がニホンウズラに及ぼす影響に関する研究、免疫器官における免疫担当細胞の動態に関する研究などが行われています。③においては、ウシ卵管上皮細胞の不死化過程における染色体異常の発生とテロメア長との相関の解析、ウシのビタミンAに関連する諸々な現象に関する内分泌学的な研究などが行われています。④においては、各種鳥類のDNAによる性判別、ラットのストレス時におけるセロトニン分泌に関する研究などが精力的に行われています。

研究室における日頃の活動は、3年次には生理学に関する基礎的な知識や実験の技術を身につけるために専攻実験実習・講義が課せられていると共に、学生は実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文研究の補助として協力しています。4年次には、前述した研究のほか各個人の興味を持ったテーマを先生方との論議により決定し、卒業論文研究を行っております。留学生を含む院生は自分の学位論文のテーマに則り、日夜研究に精励し、その結果を学会等に発表しています。

年間の主な行事として、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、週1回のゼミナール等があります。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
磯辺　里奈	インコにおける性マーカー遺伝子のシークエンス解析	渡邉　半澤
井上　佳子	ニホンウズラにおける発生停止胚の組織学的解析	渡邉　吉田
岩崎千恵子	ウシ卵管上皮細胞の不死化過程における染色体異常の発生とテロメア長との相関の解析	渡邉　半澤
内方　美里	ウズラにおける熱ショックタンパク質（HSP70）の遺伝子学的解析	渡邉　半澤
岡　友希子	拘束されたニホンウズラの脳内セロトニンならびに血漿中トリプトファンにおける雄雌差について	渡邉　吉田
小原　哲郎	ニホンウズラのMHCクラスII遺伝子座の解析	渡邉　半澤
小渕　愛	ウマp16遺伝子の発現解析	渡邉　半澤
金子　雅史	チリフラミンゴにおけるCHD領域の固体変異について	渡邉　半澤
小清水　健	ニホンウズラのサザンハイブリダイザーションによるMHC遺伝座の種類と数の推定	渡邉　半澤
近藤　英理	母牛の分娩前後と子牛の分娩後における血中レチノール量とレチノール結合タンパク質量の変動について	渡邉　吉田
酒井佑里子	ラットのストレス時における動態観察および脳内セロトニン分泌量の変化について	渡邉　吉田
坂田　道子	ニホンウズラにおけるMHCクラスII発現遺伝子の解析	渡邉　半澤
重留　和秀	ニホンウズラの抗体産生能の差異におけるリンパ球のFACS解析	渡邉　半澤
竹村　祐二	製糖ケーキ（木炭粉末）のウズラへの投与効果	渡邉　吉田
堤　けい	母牛の分娩前後と子牛の分娩後における血中レチノール量とサイロキシン結合タンパク質（トランスサイレチン）量の変動について	渡邉　吉田
灰谷　優子	ニホンウズラにおける各種抗原に対する抗体産生能の系統間差異の解析	渡邉　半澤

原口　淑子	鶉の上皮細胞培養法の確立	渡邉　半澤
水澤　孝	ニワトリとニホンウズラの属間雑種におけるMHCクラスⅠ遺伝子の構造解析	渡邉　半澤
水島　陽子	ニホンウズラにおけるマクロファージのマイトージェン刺激による形態学的・免疫学的解析	渡邉　半澤
山口　義雄	ニホンウズラにおける血清IgG値の遺伝様式の解析	渡邉　半澤
横瀬健太郎	ニホンウズラにおける白色卵殻卵の産卵に関する研究	渡邉　吉田
吉田　景子	キジ科鳥類のミトコンドリアDNAに関するシークエンス解析	渡邉　半澤
伊藤　志穂	ウズラにおける培養上皮細胞系の確立	渡邉　半澤
岩崎津羽沙	ウマ末梢血由来造血系幹細胞におけるヘモグロビン遺伝子発現	渡邉　半澤
小夫奈津希	ニホンウズラのMHCクラスⅠ遺伝子のSSCPによる発現解析	渡邉　半澤
佐々木雪乃	ウズラ胚の発生・形成におけるアポトーシスの変遷	渡邉　半澤
柿崎　裕樹	分娩前後における母牛の血中・乳中レチノール量とβカロテン量、並びに仔牛の血中レチノール量とβカロテン量の変動に関する研究	渡邉　吉田

家畜衛生学研究室

我が家畜衛生学研究室は、室長の近江助教授をはじめ、渡邊助教授、鹿江嘱託教授のご指導のもと、大学院生二名、四年生二十九名、三年生二十六名、で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病に対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

家畜衛生とは「家畜・家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が元来の家畜衛生でありましたが、最近では「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物（ペット）の衛生管理法など家畜家禽以外の各種動物も対象となってきています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では、模擬店で「しし汁」を出店し、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会等があり、室員の団結を深め、各々が、目標意識を持って有意義な研究および、研究室活動を行っています。

なお、平成十三年の卒業論文の題目は次のとおりです。

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
岩瀬　紀仁	厚木キャンパス内の豚舎内細菌相について	渡邊　近江
大迫　一世	厚木キャンパス内飼育山羊の内部寄生虫卵保有状況	近江　渡邊
岡　阿有美	ダチョウの消化管内細菌叢に関する研究・初生雛糞便中の細菌について	渡邊　西脇
小川美由紀	削痩を主徴とした犬の臨床病理的考察	近江　渡邊
上嶋　伸	山羊に寄生を認めたハジラミの駆除法（生体試験）について	近江　荻原
国玉ゆ里奈	豚回虫人工感染豚の臨床的観察	近江　鈴木
合田　恵子	牛肝細胞に対する正酪酸の傷害作用の検討	鹿江　渡邊

鈴木あきの　壊死桿菌由来DNA分解酵素の分離について　鹿江　渡邊

高島　美雪　豚のAscaris suum　感染症の血清診断について　鹿江　渡邊

竹内佳奈子　小動物臨床における東洋医学の応用—低周波刺激による治療効果につて—　近江　渡邊

中村　桂　富士畜産農場飼育牛における病原ウイルスの浸潤調査　渡邊　近江

袴田　麻愛　厚木キャンパス飼育動物由来糞便内大腸菌群の薬剤耐性パターンについて　渡邊

羽黒美和子　犬の体表に認めた腫瘤の臨床病理的考察　近江　渡邊

張ヶ谷文美　東京農大家畜診療所由来病的材料の細菌学的検査　鹿江　渡邊

日向　梨佳　獣医療施設におけるペットロス対策の実情　近江　渡邊

廣澤麻里子　富士畜産農場飼育採卵鶏群のサルモネラ浸潤調査　西脇

前川　郁絵　小動物臨床における東洋医学の応用—犬の経路について—　近江　渡邊

松井　健一　厚着キャンパス内動物舎における衛生害虫の駆除試験　近江　荻原

丸塚　正晃　相模原市近郊酪農農家における内部寄生虫卵保有状況　近江　荻原

三谷　直子　厚木キャンパス内動物舎における衛生害虫（ハエ）の発生状況　近江　渡邊

森川　忠昭　厚木キャンパス内の鶏舎内細菌相について　渡邊　西脇

山野　幸子　伴侶動物（犬）における体表の衛生対策　近江　渡邊

吉江　香興　愛玩動物（水棲亀）より分離されたサルモネラについて　渡邊

四元まい子　豚腎臓株化細胞による継代が鶏ニューカッスル病ウイルスの病原性におよぼす影響　渡邊

蓬田　洋光　伴侶動物（犬）のアレルギー性疾患に対する血清診断の応用　近江　渡邊

渡邊　深里　山羊に寄生を認めたハジラミの同定結果について　近江　渡邊

渡邊　靖仁　豚サーコウイルスに対する消毒剤による殺ウイルス効果の検討　渡邊

古舘　麻美　厚木キャンパス及び厚木市防災の丘公園飼育家兎の健康診断結果について　近江　西脇

益満　武史　鶏伝染性気管支炎ウイルスに対するホロホロチョウの感受性について　渡邊

岩月　繁典　山羊に寄生を認めたハジラミの駆除法（試験管内法）について　近江　渡邊

野生動物学研究室

本研究室は吉行教授、（河野教授）、安藤助教授の御指導のもと、室員がそれぞれの目的を持って研究活動を行っている。

地球上に存在する生物は地球環境の変化によって存在が左右され、人類を含む生物に対してこの変化は脅威となっている。そこで本研究室は動物の種の保存、人と野生動物の共存を目指し日々研究を行っている。

これらの研究を行うにあたって、我々は野生動物の分類や行動、生態といった動物学的な面の追求で、フィールド調査（サンプルの捕獲や行動観察等）を主として研究を進めている。研究の対象として扱っている野生動物としては、コウモリ類やヤマネ、ネズミ類などの小型哺乳類、ムササビやリス、ネコ、タヌキなどの中型哺乳類、ジュゴンなどの大型哺乳類である。また、近年日本の生態系に影響を及ぼしている移入種として、アライグマやタイワンザル、ブラックバスなども研究材料としており、他にもイワツバメ、コアジサシなどの鳥類の生態といった幅広い研究を行っている。（＊河野教授は平成13年度からバイオサイエンス学科動物発生工学研究室に所属された。そのため、昨年御指導を受けていた学生7名が含まれている。）

平成十三年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
相沢　妙子	狭山丘陵におけるリスの分類・生態・種の解明について	吉行　安藤
安藤　陽子	神奈川県厚木市に生息するアブラコウモリ（Pipistrellus abramus）の生態	吉行　安藤
野島　智司	沖縄に生息するジュゴンが食する海草の成分分析	吉行　安藤
池田　友紀	鎌倉市におけるアライグマの行動圏	吉行　安藤
磐田　真澄	鶏の卵の体外培養と始原生殖細胞の採取・同定	河野
岩本まき子	マウス雌性発生胚における胎児形成率の向上について	河野
宇佐美吾郎	牛GV期卵子のガラス化保存及び融解、体外受精後の発生について	河野
榎本ひとみ	鎌倉市における移入アライグマの生息状況と人間との関係	吉行　安藤
今野加奈子	八丈島における放鳥や狩猟がコウライキジの生息や分布に及ぼす影響	吉行　安藤
齋藤　愛	都市部に分布を拡大するイワツバメの生態	吉行　安藤
齊當　史恵	伊豆大島におけるタイワンザルの現状～特に分布と群の構成について～	吉行　安藤
佐伯　真美	御岳山におけるムササビ（Petaurista leucogenys）の食性について	吉行　安藤
酒井　義孝	イエネコとヒトとの関わり	吉行　安藤
佐藤　栄美	東京農業大学厚木キャンパスにおけるビオトープ計画の課題	吉行　安藤
高品江三子	富士畜産農場周辺地域における人工水路またはU字溝が小型哺乳類に及ぼす影響について	吉行　安藤
高中健一郎	神奈川県厚木市七沢におけるホンドタヌキの糞分析による食性及び行動圏について	吉行　安藤
遠藤　洋平	相模川中流域に生息するコアジサシの行動について～特に繁殖と採食行動～	吉行　安藤
尾形　亮	牛のMⅡ期卵子のガラス化保存及び体外受精後の発生について	河野
岡鼻真由実	ムササビ（Petaurista leucogenys）の音声パターンの分析ならびに行動との関連	吉行　安藤
倉持　有希	マイクロサテライト領域におけるマウス系統間の多型検出	河野
御幸　有美	ブラックバス（オオクチバス）が生態系に及ぼす諸問題について	吉行　安藤
五味　寛之	サラブレットの毛色・白斑の遺伝性について	河野
近藤　賢尚	稲城市における食虫類に属する種の分布及び環境などの関連性について	吉行　安藤
今野　和幸	乗馬療法の現状と展開方向	吉行　安藤
武石　桃子	東京都青梅市御岳山における小型哺乳類の生息状況～特に環境との関係～	吉行　安藤
多田　麻里	マウス新生児の卵巣卵母細胞の体外発育についての研究	河野
中西　祥彦	神奈川県北部における（藤野町、相模湖町）における哺乳類相	吉行　安藤
成田　智幸	湘南地方におけるノネコのグループ社会について	吉行　安藤
山田　訓史	神奈川県下における野生傷病鳥獣の推移～ならびに厚木市周辺における交通事故との関連性について～	吉行　安藤
西尾　巌太	コモンマーモセットの人工繁殖について	河野
船橋　暁子	伊豆大島におけるキクガシラコウモリの生態～出産・哺育について～	吉行　安藤
松田　朝子		
松橋　彩子		

退職にあたり

轍（わだち）

家畜生理学研究室教授
渡邉誠喜

はじめに

本誌「ふじみの」の編集者から本題の原稿の依頼を受けた。そこで、サブタイトルを付して認めることにした。気の向くままに綴るため誤りや記憶違いがあるかも知れないが、ご寛容いただき一読いただければ有り難い。

筆者は一九三三年九州の真ん中、阿蘇の旧カルデラの中に生を受け、ちょうど六十九年になる。昔流に言えば、数え七十歳で、古希にあたる。この間の大部分を本学、東京農業大学農学部畜産学科に籍を置き、大学以外での社会生活はなかったことは、良否、意見の分かれるところである。

学生時代

筆者が学生時代を過ごした農大畜産学科は千葉県茂原市高師に千葉農学部として存在していた。千葉農学部には畜産学科と林学科の二学科があり、入学生数は畜産学科が二十七名、林学科が五十数名であつた。二十七名の同期生の内五名が二年次への進級の折、東京世田谷校舎の他学科へ転科した。筆者も転科の希望を申し出たが、当時の学校法人常務理事の井下清先生の説得にあい、茂原の地に落ち着き、畜産学の勉強を継続することになった。あの時、転科しておったら、大分変わった人生を送ったことであろうと思われる。その折から特別奨学金？を頂くことになった。当時の畜産学科の教科担当は専任の先生が七名、非常勤講師が八名で非常勤の先生は大部分が農林省畜産試験場（当時の名称）からおいで頂いていた。卒業論文は「山羊の赤血球抗原の型的分類」で、細田達雄先生から御指導頂き、血清学を専攻し、これがその後、筆者の専門の一つとなった。

助手から講師時代

大学卒業時は大変な就職難であったが、幸いにも全国酪農業協同組合連合会に決定し、そのつもりになっていたところ、当時の助教授の先生から、これまた、口説かれ、大学の助手として残ることになった。しかし、蓋を開けてみると無給助手であった。致し方なく研究とアルバイトへ精力を傾注した。無給時代が二年と三か月続いた。学術論文の第一号は卒業論文を英訳したものであるが、掲載されたときの感激は今でも忘れられない。茂原の片田舎では研究し難く、この頃には東京医科歯科大学の法医学教室の談話会やセミナーに良く通った。

昭和三十六年畜産学科も世田谷キャンパスへ移転し、その年の夏から在来家畜調査が始まった。筆者は学生一名と共に他大学の教授の方々と、鹿児島県大島郡十島村（吐葛喇列島）へ出かけた。鹿児島大学の家畜解剖学教室でプロジェクトチームの先生方に血清学反応のデモンストレーションも行った。

家畜生理学研究室の設置

昭和五十二年に畜産学科において家畜生理学研究室が設置され、筆者（当時助教授）一人の研究室が発足した。それまで家畜育種学研究室に所属していたため、専門の変更も余儀なくされ、生理学的研究テーマを選定することも容易でなかった。設備もままならず、家畜育種学研究室から分与された乾熱滅菌器と、電源を入れると実験台上を動き回ってしまう傘型遠心分離機だけであった。そこで、経費のかからない実験を捜し求め、鶏胚の蛋白代謝、ニホンウズラの免疫グロブリン・糖代謝、反芻獣の下垂体の免疫学的性質などに取り組んだ。当時の論文題目も立派なもの？で、今と余り代わり映えしないタイトルである。

大学院畜産学専攻

本年四月から本学の大学院農学研究科に専攻並びに博士課程の増設が認められたため、全学部・学科に大学院が備わることになった。従来、大学院は農学、農業経済学および農芸化学の三専攻のみであった。畜産学専攻は昭和六十一年四月に林学専攻並びに食品栄養学専攻と共に修士課程が設置された。その後、平成二年四月に博士課程林学専攻、生物環境調節学専攻と共に畜産学専攻が増設され、いよいよ充実した畜産学の研究・教育が可能となった。農学・農業経済学・農芸化学の三専攻に新たに専攻を増設する折りは、いろんな意味で苦労も多かった。筆者はその審査に当たる文部省の委員の先生を訪ね、いろいろ御指導をお願いした。

その後、筆者自身が文部省の大学設置・学校法人審議会の専門委員を引き受け、いろんな大学・大学院の増設に関する審議に当たり、本学の畜産学専攻増設時の苦労が思い出された。

家畜受精卵移植に関するプロジェクト研究

家畜人工受精技術の発達は昭和二十五年頃からであるが、昭和六十年頃から国立研究機関をはじめ都道府県の研究機関で家畜受精卵移植に関する研究が盛んになった。そこで筆者の専門外であったが、この技術を学生教育へ取り入れるべく十名からなるプロジェクトチームを組み、研究費を受けて受精卵移植に関する研究に取り組んだ。三年の後、幸いにも富士畜産農場に繋養のジャージー種の雌に黒毛和種の受精卵を移植することに成功し、めでたく黒毛和種の雌子牛の出産にこぎつけた。その成果を得て、家畜人工授精師講習会を拡大し受精卵移植師に関する講習会をも開催するようになり、今日に至っている。先見の明が如何に重要であるかを思い知らされるところである。

国際会議

筆者が初めて国際会議へ出席したのは昭和四十九年第

十四回国際家畜血液型学会であり、この会議はアメリカ・カリフォルニア大学ディビス校で開催された。筆者はここで、「日本鶏に関する血清学的研究」について論文を発表した。尾長鶏やチャボのスライドを映し、日本特有の鶏の血清学的特性について紹介した。発表後のディスカッションでは語学力、特に会話力のなさを痛感した。その後、数回、様々な国際会議に出席した。平成八年十月に千葉県幕張メッセで第八回アジア・大洋州畜産学会議を（社団法人）日本畜産学会会長として主催し、世界三十一ケ国から千百十名の畜産学研究者が参集し、アジアのみならず世界の畜産学について情報交換の場を提供出来たこと、また、このような会議を政府機関は勿論、国公私大の先生方の絶大な協力の下、成功裏に開催できたことは筆者の大きな喜びでもある。この会議は日本学術会議と社団法人日本畜産学会との共催であった。

日本学術会議

日本学術会議は、科学が文化国家の基礎であると言う確信に立ち、わが国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発達をはかり、行政、産業、および国民生活に科学を反映、浸透させることを目的として、昭和二十四年一月に内閣総理大臣の所轄の下に「特別の機関」として設立され、この度の中央省庁再編に伴い、総務省に置かれることになった。

日本の研究者は約七十三万人にのぼり、学術会議への登録研究団体（学・協会）は千百五十六団体である。学術会議は第一部から第七部まであり、第一部＝文学、哲学、教育学・社会学・心理学、史学。第二部＝法律学・政治学。第三部＝経済学・商学・経営学。第四部＝理学。第五部＝工学。第六部＝農学。第七部＝医学、歯学、薬学で、各部に概ね三十名、計二百十名の会員が所属している。筆者は第十七期と第十八期の第六部の会員である。ここには七つの常置委員会、八つの特別委員会と百八十の研究連絡委員会があり、筆者は学術体制常置委員会委員および畜産学研究連絡委員会委員長を務めている。畜産学研究連絡委員会では、これまでクローン動物に関する研究指針を学術会議の対外報告として報告し、シンポジウムを毎年一～三回開催している。

本年三月、日本獣医畜産大学での日本畜産学会第百回大会において「畜産食品の安全性と家畜生産の将来像」と「牛海綿状脳症は撲滅できるか?」についてシンポジウムを開催することになっている。著名な先生方のお話が聴ける良い機会であるので、学生諸君の聴講を期待している。因みに参加費は無料である。

終わりに、大学を卒業して、今年でちょうど四十五年になる。この間の思い出を綴ってみたが、人生、過ごしてみると速いものである。学生諸君も、今その時々を大事に過ごされんことを祈念するのみである。

野生動物学研究室のあゆみ

野生動物学研究室教授
吉　行　瑞　子

私の教員室は厚木キャンパス研究棟の4階のコーナーである。近景には春になるとピンク色の桜と緑の葉が調和し、秋には黄や赤色に染まった紅葉がみられる森、その向こうにはハイカーに愛されている大山、その背景には霊峰富士山の山頂も仰ぎ見ることができる。

初めて訪れる方は「すばらしい眺めですね」とおっしゃる。平成十二年三月に世田谷キャンパスから越してきた時、なんとすばらしい景色と感動した。出勤してブラインドを上げて絶景に接すると、安らぎをおぼえる。来る三月末、この教員室を去らなければならない。

厚木キャンパスの講義棟で講義を始めたのは、平成十年の四月、今年三月卒業される皆さんが入学された時である。一年次の科目を多く担当しているので、十年度、十一年度は世田谷キャンパスには研究室に三、四年生が待っていたので、厚木キャンパスと世田谷キャンパスの掛け持ちの生活だった。

東京農業大学教授の辞令を理事長からいただいたのは平成四年四月であった。所属は短期大学部教養課程の生物学担当ということだった。

まもなく教養課程は廃止され、教養課程に所属していた教員は他学科に振り分けられることになった。野生動物関連の科目担当ということで、畜産学科に迎えて下さった。

当時、学科長でいらっしゃった伊藤澄麿先生、主事の門司恭典先生には大変お世話になった。

教養課程から分属した教員の研究室名はどの学科でも共通研究室という名称だった。共通研究室の名の由来は未だに理解できない。

畜産学科の共通研究室には野生動物好きのいいキャラクターの学生さんが集まってきた。畜産学科の先生方のお力添えで、共通研究室の名を長く引きずることなく、専門領域の野生動物の研究室が誕生したのである。

平成十三年度では四年生三十一名、三年生二十八名の大きな研究室に成長した。平成九年度から十二年度まで、卒業生を社会に送り出すことができた。

ある哺乳類の研究者から「調査地や学会で先生の研究室の卒業生や現役学生によく会います。将来が楽しみですね。」との賀状を今年いただいた。

野生動物に関する教育や研究を行うことができ、多くの学生が所属する研究室はおそらく、他大学や他機関には見られないと思う。

平成十四年度から優秀な教員三人となり、充実し、且つ飛躍することだろう。

ふじみの寄稿原稿

東京農業大学に赴任して

畜産物利用学研究室教授
渡邊乾二

平成十三年四月に東京農業大学農学部畜産学科畜産物利用学研究室に嘱託教授として赴任してまいりました。この一年足らずの間に感じました印象につき、私の考え方もまじえて述べてまいります。

まずは、この東農大農学部にて学ぶ学生・院生は建物・設備・管理・実習施設の良さ、大学周辺の自然環境の素晴らしさに感謝すべきだと思います。自然に接しながら、農学を学ぶのにこれだけの環境の良い大学（学部）は数多くないでしょう。私も、冬季の富士山山頂の美しさと大山山麓の四季変遷における自然の姿に感動を覚え、このような豊かな自然のもとで仕事ができることを有難く思っております。

辞令交付に際して、理事長と学長から東農大の建学、農の哲学を拝聴いたしました。実学主義を基本としているところにこの大学の存在意義が大きいと感じました。

この農学部は、学生にとってその特徴ある精神を生かした勉学のやり方を身に付ける最高の場であると思います。そのためにも実学主義とは何かを自分で考え、納得して行動する必要があるでしょう。多数の農場があることは、実習を重視する教育理念の現れと理解しております。一方では、大学ばかりでなく、実学主義の精神のもとに学生時代に、ボランティアにしてもともかく一度社会に出てみてはと言いたい。社会と向き合う中で、自分の立場にてどういう技術者（研究者）を目指すかを考えて欲しい。そうすれば社会から得られるものが多くあるでしょう。いろいろなことを経験し、学生時代に明らかな目標を立て、それを達成するための毎日であれば大きな収穫となるでしょう。講義・実習においても、ただ漫然とそれらを受けるだけでなく、自分の今後の目標のもとに、その達成の手段としての位置付けをもって行動してもらいたいと考えます。

東農大は平成十三年度に創立百十年を迎え、社会に対して伝統の強さを示しております。これは非常に大きな財産です。日本の多くの農学部が名称変更を行なっている中で、農学部と畜産学科の名称を大切にしているのも伝統に基づく考えでありましょう。名称を大切にし、農学部の中の畜産学科としての重みを出せるように期待いたしております。ここにも個性を出しやすい私立大学の強さがあると思います。私の所属する研究室も、従来どおり畜産物利用学という看板を使っております。日本で

は数少なくなったその看板を掲げていることに誇りを感じておりますし、人材育成の方針も名称から明確です。当然のことながら、教育・研究内容は時代に相応した新たな展開が求められるでありましょう。

これまでの私の三十五年余の大学生活においては、教育・研究・管理の三本柱のもとに行動してまいりました。こちらに着任しましてからは、ほとんど教育のみの勤務となりました。今、改めて教育の難しさを感じております。これまでは、学部の講義においてはほとんど四〇名以下の学生を相手の講義でした。これは学生との意思が比較的通じ合える数と思います。ここでの大多数の学生相手の講義を如何に効率良く実施するのか私の大きな課題となっております。これまでの経験にて、プリント、OHP とかスライドを用いた講義の有効性にも若干の疑問をもっております。書籍、コピー機、電子媒体などが発達した今日において、講義という知識の伝達方式を如何に効率よくするのか難問です。古いやり方ですが、学生の感触を探りながら板書を交えて喋ることにも活路を見出したいものです。講義の一つ一つの項目に課題を明確に提示し、学生に関心をもたせ、それを説明していくのが一つの方法かと考えております。

学生には、教育は知識の伝達としての講義、講義内容の確認作業或いは身をもって体験する実習（演習）、講義と実習の統合としての卒論研究から構成されているという流れを理解してもらえればと思います。さらに、大学では自ら知識を体得しなくてはならないことを肝に銘じておく必要がありましょう。ただ、実学主義に基づくものかも知れませんが、カリキュラムに専門科目が多く基礎科目が少なすぎると感じております。現実を見つめて、実際的な課題を創造的に解決するには、発想の原点となる基本的な知識が必要です。

一方、毎日のちょっとした体験につき考えている内に、意外に大きな問題に行き当たるものです。どんなありふれたもの、何気ない事柄にも、それなりの背景があり、最初から小さい物を自分なりに念入りに調べる習慣を身につけましょう。針の穴から天がのぞけるかも知れません。そんな考えにたって身の回りのものを点検していけば、そこに実学主義の中に独創性が出てくるでしょう。言われたことだけをこなす、いわゆる詰め込み型の学生と、課題発見・解決型の学生では、社会での活躍が違ってきます。どうかさまざまなことに好奇心と情熱をもって、感性・勘性を研いて社会に役立つ人材に育って欲しいと念願いたしております。院生に特に言いたいことは、専門化しすぎることも必要ですが、反面、常に巨視的な目を持ち続けないと本質はつかめないということです。

実学主義を精神とするインパクト講義は如何にあるべきかを模索する作業に遅ればせながら着手したところです。

未来に向けて

家畜生理学研究室助教授
半澤　惠

今年の体育祭は充実した5位だった。収穫祭厚木・世田谷同時開催という厳しい環境の中で、宣伝隊、特企、家畜苑、研究棟アート、食堂屋根の装飾等々をこなしながらの、皆が力を合わせた堂々たる成果。だけど“勝負は二の次、参加することに意義がある”なんて綺麗事は云わない。出る以上は勝ちたい。ハンディを感じ、それを言い訳にするのは悔しい。だから頑張ってきたはずだ。だが、日程的に苦しかったのも事実。気合いだけでは、根性だけではどうにもならないことを痛感したことと思う。さらには組織力、計画性の大切さを再認識しただろう。

ところで、収穫祭畜産学科統一本部の実質的な母体である“畜友会”とは何だろう?会則第一章、第三条に「本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。」とある。またこの場合の会員とは第三章、第五条（1）に「正会員　畜産学科の学生」とある。だからこそ基本的に学科学生の全員から畜友会費を徴集している。と同時に農学部学生は全員入学と同時に農友会厚木支部会員、全学応援団団員となり、それぞれの会費を納入している。日本一の学園祭である収穫祭を毎年、盛大に開催することができるもの、これらの組織と資金があってこそ、である。現在、何らかの形で課外活動に積極的に参加している諸君も、そうでない諸君も、このことをしっかり心に刻み、折に触れて思い起こして欲しい。そうすれば、より充実した学園生活を送る為に何ができるのか?少なくとも1つの道が開けていることに気付くはずだ。手厳しいことを云うようだが、畜友会役員は“単なる仲良しグループ”で満足してはいけない。一人でも多くの学友に、畜友会会員としての活躍の場を提供し続けて欲しい。それが、畜友会役員全員の権利であり、義務でもある。

気の合った仲間内だけで「俺達の友情は一生消えることはない。生涯の友人だ。」熱い心でそう叫んでも、二四時間、何十年もそう叫び続けることは出来ない。それは厳しい現実の前では一瞬の炎にすぎないかもしれない。何十年振りに会っても一瞬の内に当時の自分に戻れる仲間を持つことは“かけがえのないこと”だ。でもそれがもっとも大切な宝だとしたら、かつての仲間と過ごす僅かな時間の“前”、そして“後”の長い現実の時間の中での自分は何なんだろう?人生も知識も技術も“断片のつぎはぎ”ではない。すべては繋がっている。絶えることなく時と共に連綿と流れ続けている。だから、いつも“開かれた仲間意識”をもって様々な価値観を持つ大勢を

束ね、それを大きな力に変えて行く努力を忘れてはならない。地味であっても優しく包み込むような大きな包容力を、声を上げず叫ばなくても自然に行動に移せる強い自信と、いつまでも子供のように無邪気に成長し続ける人間性をもって欲しい。

そして今、畜友会にとっては、「本当の仲間意識とは何なのか」、を改めて真摯に捕らえ、行動を起こす好機だと思う。全員が厚木キャンパスに揃った二〇〇〇年に何が何でもやるべきだった収穫祭もみんなの頑張りではや2回目を無事終了した。畜産学科の諸研究室はおそらくどの学科よりも積極的にこれらに参加していた。この活力を一、二年生に伝え学年を越えた結束をつくることができたら、何でもできる。そして開いた仲間意識は卒業後も広がり続け、実社会においても互いにとって大きな力となるはずだ。

今年は厚木第一期生の卒業の年だ。卒業生諸君おめでとう!もう世田谷から先輩が訪ねて来たのも、定期を買って世田谷に通ったのも二年前だ。新生畜友会もようやく乳離れしたのかな。この厚木の地で培ったスピリッツを大切に新しい社会で活躍してくれ。そしてたまには帰巣本能を発揮してキャンパスを訪ねてこい。進学等で本学に残るものも心機一転、精進せよ。

さて、新入生の皆さん、入学おめでとう!若いキャンパスでの皆さんの活躍を心より願っている。畜産学科学生として、また畜友会会員として勉学においても課外活動においても農大生らしく元気に明るく楽しい学園生活を送り、実社会に役立つ真の知識と技術を身に付けて欲しい。

若者と技術力

野生動物学研究室助教授
安藤元一

昨年四月に農大に赴任してきて最初の印象は、キャンパスや厚木の街に若い人があふれていることです。大学に若者が多いのはあたりまえのことなのですが、私がこれまでおりましたコンサルティング業界では若者が少なくなっていて、課内の最若手が三十代という部署はざらでしたから、日本の若者はこんなところに隠れていたのかと強く感じました。若い人の少ない社会は効率的ではありますが、やはりどことなく活気がありませんから、農大に来たことをほんとうにうれしく感じました。

企業社会に若者が少ないのは日本の人口構成がいびつになっていることもありますが、競争がきびしくなって新人の採用が少なくなっていることがもっと大きな理由です。とりわけ、業務に個人の技術力が重視されるようになってきたことが大きく影響しています。官公庁の入札ではこれまで同じものができるならば価格の安い方が良いということで価格が重視されていたのですが、コンサルティング業務では成果物の出来映えを比較することが困難ですから、価格だけでなく技術力を入札の基準に使おうという動きが強まっています。入札システムによっては、技術点で大きく差が開けば価格点を開かずに決まったり、技術点一位の会社に価格交渉権が与えられることさえあります。

従来は、技術力の尺度として会社全体の技術力が重視され、社内の誰がそのプロジェクトを担当するかは会社の裁量にまかされていたので、社内の若手に重要な仕事を任せて育成することが可能でしたし、極端な場合はアルバイトにかなりの仕事を任せるといった場面さえあったようです。しかし、ISO9000シリーズなどの品質管理システムが導入されるようになってくると、誰がそのプロジェクトを担当したかという個人の技術力が最大の品質保証になるので、入札時に申請した担当者を変更することができません。

ここでいう個人の技術力とは、それまでに経験した類似業務経験数や技術士をはじめとする各種個人資格のことです。仕事への情熱などは残念ながら加算されません。若い社員はいくら意欲に富んでいても当然に業務経験数や保有資格に劣りますから、業務を受注するためにはそうした人を充当することができません。すなわち、二十歳代の社員の活躍できる場面が少ないのです。これまでしたら若手社員はそうした業務を補助する中で経験を積んでゆくのが普通でしたが、近年の競争激化から会社にそうしたトレーニング期間を支えてゆくだけの余裕が無くなり、中途採用で即戦力を求める傾向が強まっています。またこのように流動性が高まると、時間をかけて若い社員を育てても転職されればおしまいですから、じっくりと若手を社内で教育する余裕が無くなっています。

もっとも、若い人に目がないのかといえばそうでもありません。価格競争も同様にシビアですから、若くて相対的に給与水準の低い若手社員が他社の年輩社員と同じ業務をこなせれば、経営上きわめて極めて有利で、仕事のチャンスは十分あります。ただし、そのための技術力は必要です。

もう一つの傾向は仕事内容の二極分化です。つい何年か前までは、生物調査をやるような会社が少なく、また生物調査をできる若い人達があまりいなかったこともあって、少し鳥を知っているというレベルでも仕事がありました。また、生物が何目何種おりましたという調査だけでなく、どうしたらそれらの種へのダメージを少なくした工事が可能なのかといった提案型の仕事に、専門知識の少ない者がかかわれる機会がけっこうありました。しかし、業務単価が抑えられて効率化が求められ、加えて上記のような品質保証が要求されるようになると、一人の技術者あるいは一つの会社が猛禽類調査のような現場調査とそれをとりまとめる計画型の仕事の両方をこなすことが困難になり、会社レベルでも調査系と計画系に分化しつつあります。コンサルティング会社として最も大切な能力は顧客のどんな要求にも合格点のとれる報告書を提出できる応用力ですが、この点からも社内でオールラウンドにどんな仕事でもこなせる人間を養成することは難しくなっています。

これまで日本の会社は若くて元気な人を採用し、社内で鍛えて（on-the-job training）一人前に育て上げるという傾向があったので、採用時に大学で何を身につけてきたかはそれほど問われませんでした、しかしこうしたことから見ると、教育は専門機関で、業務は会社でというように、どうも両者は分離する傾向にあるようです。これは大学卒業時に社会人として要求されるすべての能力を身につけておけということではありません。要求される能力は高度化していますし、皆さんの進路も多様化していますから、それは無理な話です。畜産学科における勉強は、どのような分野に就職しても応用力を発揮できるためのmethodologyを身につけることと考えていただいた方がよいでしょう。実社会でほんとうに必要な技術は、会社に籍を置いたまま大学院に入学して習得するようなケースが増えてくると思われます。他方、インターンシップのような形で学生が実社会の中にはいって業務についての経験を積むことも必要と思われます。ある一定の年齢を境にしてそれより若い人は大学に、それ以上の年齢層は会社にという住み分けの図式は崩れてゆくだろうし、いろんな年齢層が傾斜的に混じり合うことのできる社会にしなければならないと思います。

『大切なこと』を思い出す
きっかけとなった沖縄出張

家畜繁殖学研究室
桑　山　岳　人

【テロ厳戒態勢（？）の中の沖縄出張】

十一月八・九日に沖縄知念村で開催される第二十六回鳥類内分泌研究会に出席するため、十一月七日羽田空港を出発した。当初、厳戒態勢のためチェックが厳しいだろうとの旅行社からのアドバイスもあり、出発時間より大分余裕をもって羽田空港に到着した。おそらく通常時よりは厳しいチェックであったのだろうが、国内では飛行機をあまり利用しない僕にとっては、もっとゆっくり自宅を出てきても良かったかなという程度であった。

今回我々農大のグループは、小川博先生と大学院生の勝又瑞穂君と僕の三人であった。出発前には勝又君がご両親から「これからでも開催地の変更はないのかねー」と言われたそうだ。大丈夫だよと言いながらも、ご両親に心配をお掛けしたなと感じつつ那覇空港に到着した。沖縄では新聞でもテレビのニュースでも観光客の激減（当時の発表で一二〇万人の減）により、経済的損失は二〇〇億円以上と報道されていた。僅かながらでも、我々の研究会が沖縄の地で開催されて良かったなと感じた。しかし、実際沖縄に来てみると、テロに対する厳戒態勢を感じたことは一度もなかった（厳戒態勢を敷くような場所には行かなかったかもしれないが）。

【勝又君の発表デビュー】

今回の勝又君の発表は彼女にとってデビュー戦である。研究室では、百目鬼先生、門司先生に発表練習を聞いていただいた。練習時は少し心配していましたが、いざ本番となるやその発表は堂々としたもので、質疑応答にも、的確かつ丁寧に対応していたのには大変感心させられた。実際、多くの先生方から関心を示していただき、発表終了後に開催された懇親会では、数人の先生からも共同研究の声がかかった程であった。来年は、佐渡で開催されることが決定しています。おそらく『鴇』に関する特別講演もあると思いますので、是非ご参加下さい。会員以外の方も大歓迎です。皆さん、朝から晩まで研究の話題がたえない楽しい会です：おそらく参加者の半数以上は院生をはじめとする学生です。

【体調との長いつき合いが恩師との出会いに】

私ごとだが、実は僕はこの出張の二ヶ月程前から体調を壊していた。それは高校受験直前に胆嚢炎で胆嚢を切除して以来、体調を崩しやすくなり、この体質とは長い付き合いなので、半ばあきらめていた。今でも忘れられないのは、大学受験の英語の時間大半を受けられなかったこと。大学入学後は最初の講義中に体調を崩し教室を

一旦抜け、教室に戻ると、既に教室はもぬけの殻、僕のバッグだけが残されていた。もちろん最初の講義でなければ、何人かの友人が出来、カバンを預かってくれたであろうが、まさか講義終了時までに戻れなくなるとは思わなかった僕があまく、カバンを開けてみると財布の中から四、〇〇〇円が抜き取られていたこと。実は財布の中には小さなポケットに他に三〇、〇〇〇円が入っていたが、それが抜き取られなかったのは、不幸中の幸いであった。しかし、怒りのはけ口が見つからなかった僕は、講義を早く終わらせた教授に講義を早く終了させたことに対して文句を言いに行ってしまった。今となっては大変失礼なことだったと思う。しかし、この教授こそが将来家畜繁殖学研究室での恩師となる先生であったというのは、何か運命の巡り合わせのように思われる。

【恵まれた環境】

家畜繁殖学研究室に所属してからは、既に退職された一戸健司先生（現在：本学名誉教授）からは、きめ細かなご指導、真実一路の人生観を、田中克英先生（現在：本学客員教授並びに岐阜大学名誉教授）からは、研究の奥深さと面白さを教えていただいた。現在でもお二人の先生は退職後も研究面での素晴らしいアドバイザーであり、その先生方の叱咤激励のお陰で、今の自分が存在している。また、現職の現在でも、研究室の先生方からは、人と人とのつながりの大切さ、まず学生の立場になって考えること、誠実さ、講義に掛ける情熱など、多岐にわたってご指導いただいている。さらに、いろいろな会議を長引かせてしまう張本人の私の発言を暖かく見守って下さっている教職員の皆さん有り難うございます。おそらく、これだけ恵まれた環境にある人間は少ないと思う。

【大切なことを思い出すきっかけ】

さて、現在の体調はというと沖縄出張前最悪の状態であったが、ようやく通常の人の体調に戻りつつある。沖縄出張時に僕のペースに合わせてくださった小川先生と勝又君、有り難うございました。

最近、研究室の佐久間君をはじめ多くの学生から「先生最近、機嫌良いですね」と言われ、ふとこれまで体調を壊していた二ヶ月の間、多くの学生や教職員の方々にご迷惑をお掛けしていたのだなと、遅ればせながら気づいた次第である。この場をお借りして、ご迷惑をお掛けしたお詫びと暖かく見守って下さったことに感謝致します。本当に有り難うございました。これまでの、僕にとってストレス解消とは、もちろん研究がうまく進むこと、それ以上に学生と教職員の方々と何かを考えたり、作ったり、実験したり、時には激論をかわしたことだった。これからも家畜繁殖学研究室は学生も教員も何でも言える自由な雰囲気を大切にしたいと思う。身近な家族との対話も大事だったように思う。ここ数年忙しさにかまけて一番大切なことを忘れていたようである。これからは初心に帰り頑張りたいと思う。学生をはじめ教職員の皆さん、そしてもちろん家内と2人の子供たちこれからもよ

ろしくお願いします。

最後に、原稿を書く機会をくださった畜友会（畜産学科の学生と教員全員の会）の皆さん有り難うございました。

玉泉洞：左寄り小川先生、桑山、勝又君

集う学友

一年生になったら

四年　齋藤常浩

高校三年の秋。推薦受験の下見を兼ねて収穫祭を見学に来た。東門付近でくじ引きをしたところ見事に当たり、学歌が書かれた第一〇五回収穫祭記念品の湯飲みを貰った。このくじに当たったことが俺のその後を物語っていたかのように感じられる。現役の時に受けた推薦受験、一般受験は高校時代の生活がたたり、見事に玉砕し浪人が決定した。予備校で必死に勉強した末、一般受験で何とか東京農業大学農学部畜産学科の合格を手にすることが出来た。高校で受験を考える前の俺は、恥ずかしいながら「東京農業大学」という大学の存在すら知らなかった。ましてや「青山ほとり」など入学してから初めて知ったのだった。

入学手続きを済ませ、早速親とアパートを探しに上京した。パンフレットで見落としたのか、農学部は厚木キャンパスであることを初めて知った。都民になれると思っていたので少々残念だ。不動産屋の紹介と個人的な希望で一番駅の近い現在のアパートに決定した。スーパーも

近いし大学まで自転車で十分程。新築のアパート共に大学に入ってからの夢が膨らんできた。楽しいキャンパスライフが待っている。

「一年生になったーら、一年生になったーら、友達一〇〇人出来るかな♪」いや俺の場合は一〇〇〇人だ！バイトをして車買って、いい会社に就職してたくさんの想い出を作ろう！ありきたりの夢かもしれないが。入学式前日に自転車でキャンパスを拝見しに行った。正門（東門）からの道しか知らなかったので、自転車を押しながら登った。これを毎日上り下りしなければいけないのかと思うと気が重くなった。自転車置き場は何処だ？授業は何処で受けるんだ？パンフレットを片手に見て回った。当時は研究棟、学生会館も存在しない未完成なキャンパスだった。風は冷たかったが日差しが暖かかった為少し汗ばんだ。

入学式当日。スーツで経堂駅に向かった。似たような格好の学生らしき若者で電車の中が賑わった。もしかしたらこの中に同級生になる人がいるのかもしれない。世田谷キャンパスに到着して体育館に入った。そして入学式、新入生ガイダンスが始まる。学生証などを受け取り、ようやくこれで東京農業大学の学生となることができた。

先輩がいない、俺達1年生の農学科と畜産学科の学生しかいないキャンパスで学生生活が始まった。気の合った仲間が集まりサークルを作ったり、酒の飲み方も知らないまま友達同士で飲み会を開いたりと、この何もないキャンパスで、いかに自分たちが楽しく学生生活を送ることが出来るのか試行錯誤しながら。世田谷の部活・サークルに入る者もいた。もちろん俺もその例外ではない。入学式早々に、リーダー部に入部すること（俺とリーダー部についてはふじみの36号「おいらと応援団」を参照）を決めていた。応援団、組織についての常識を知らなかった俺は、四月のある日、サークルを作ろうと思い、掲示板にポスターを貼っていた。三つ目の画鋲を付けようとした時、「おい齋藤、応援団がサークルを作っていいのか？先輩に怒られるぞ」ある先生にアドバイスされた。まさかこの先生に、研究室に入室してからもお世話になるとは、当時は夢にも思っていなかった。

世田谷との往復の生活をしながら、アルバイトに精を出した。月に二〇万円稼いだ時もあり、金銭感覚が麻痺してしまった事もあった。二年の後期に研究室を決める際、人数が多くくじ引きになった。くじ引きにははずれて現在の研究室に決定したが、決して後悔することはなかった。むしろ良かったかもと思える。

三年生になると、世田谷キャンパスと合同開催ながらも、二万人の来場者を数え、初の第一回厚木キャンパス収穫祭を開催し、大成功に納めることが出来た。この年には、研究棟も完成し、一・二年生の後輩がいて、そして世田谷キャンパスから四年生の先輩が加わり、ようやく全学年が揃って厚木キャンパスが完成した。

四年生になってからは、世田谷キャンパスの力を借り

ず、世田谷と同日開催という厳しい状況ながら、第二回厚木キャンパス収穫祭を開催することが出来た。ある別な意味では厚木キャンパスの学生のみで作り上げた初の収穫祭とも言える。三・四年生の二年間俺は収穫祭宣伝隊隊長（収穫祭、宣伝隊については、ふじみの37号「彼女に届け！この思い」を参照）を勤めた。宣伝隊を通して収穫祭に携わり、研究室・応援団の活動を通して他人の生き様・考え方に触れ、俺の人生においての重要な数々の収穫をすることも出来た。

間もなく大学生活四年間が、幕を閉じようとしている。何とか就職も決定し、改めてこの四年間を振り返ってみる。果たして一年生の時に胸に抱いた夢は、目標は果たすことが出来ているのか。もちろん果たしている。厚木・世田谷・オホーツクの三キャンパスを股に掛け卒業後も生涯の友として何でも話し合うことの出来る仲間、大変お世話になった先生方、先輩、友人、後輩などたくさんの人との出会い、何事に対しても最後まで諦めることなく全力を尽くすことの出来る精神力、そして言葉では語り尽くせない程の、苦しかった、悲しかった、楽しかったたくさんの想い出を得ることが出来た。お金を出しても決して買うことの出来ない貴重な経験をした。だが今思えばやり残してしまった事など、後悔もたくさん残ってしまったが、これもまた想い出になるであろう。

今年の春からは、また一年生として新たなる社会の中へと旅立っていく。社会人一年生になったら、もう何も迷うことはなく自分の選んだ道を一生懸命進んで行きたい。もちろんその時はこの大学四年間で収穫したものを心の糧として。

『苦しき時の父となり、悲しき時の母となり、楽しき時の友となる
いざ　歌わん哉　踊らん哉　農大名物　青山ほとり
元気よく　四番！』

宣伝隊のゆかいな仲間たち

農大娘。

四年　鈴木明子

そう、あたしがアタシである為にはこの農大で四年間過ごすことが必要条件であったのだと、卒業まであと僅か…という今になって良く分かる。

何でこんなに、どっぷり農大に骨の髄まで浸ったなんてわからない。でも、今のアタシを知り得る人全てがこのことを黙認するのは間違いないであろう。

「農大が好き」そんなもんじゃない。もっともっと上等なヤツなんだ。

四年前のあたしが今のようなあたしになるなんて想像もしてなかった。

動物が好きで、あわよくば野生動物なんかがやりたいな～。偏差値の関係上獣医学部には届かないし……。そんなこんなで農大への進学を決めて…。元々は獣医学部しか頭になかったから農大という大学には興味がなかった。だから、合格通知を貰って、引越の準備をするまで厚木に移ったなんて全く知らず、ちょっと騙された気もしながら入学式に参加。そこでアタシになる予兆が始まる。学生の活気・楽しげな先輩。先輩に憧れ、活動内容も分からぬまま畜友会に所属。それは何一つ無理のない「春の次には自ずと夏が来る」みたいな自然の流れで、何も疑わず・不安すらなく、ただその流れに身を任せているのが当たり前だった。

それが一年のアタシには眩しすぎる「収穫祭」との出会いの始まり。

でもそれは自発的にやろうというものじゃなくて、大好きな先輩と一緒に居たいだけだった気がする。作業の戦力になんて程遠いし、何で先輩がこんなにムキになって「収穫祭」に熱くなるのか全く理解できなかった。

それが、今じゃ「全身全霊収穫祭な女」になってしまった。（楽しいことがあったらチョット首つっこみたい位だったハズなのに。）あたしの全てが「収穫祭」で何もかもが「収穫祭」中心に回ってた。

そう、アタシは「収穫祭」に恋してたんだ。

知らなかった相手に出会い、少しずつ相手のことが気になっていって、いつの間にかその人の事しか頭になくて。少しでも相手にふさわしい女になりたくて、勉強して・背伸びして。幾ら手を伸ばしても届かなくて切なくて。片思いだって分かっていてもその人の事を考えるだけでも幸せで、苦しくて。今度はどんな手でアプローチしようか、悩んで…うれしくって。あの人はアタシをどう思っているのか不安で。嫌われないようオドオドしたり、少し身を引いて相手の出方を観察したり。

この恋はいつまでたっても成就しない、いつまでも思い続けるだけの恋。でも、一つになれる時が一度だけあ

る。それは、ステージに立った時。その一時の為にアタシは居た。

そして、その時アタシは農大娘になる。

恋いこがれた相手を感じながら一年間思い続けた感情をぶつける。相手の反応を見ながら手を変え品を変えアピールする。時には冷たく、時には情熱的なその反応を全身で感じ、一緒になれたことを共に悦ぶ。

それを何度も味わいたくて、いつまでも一つでありたくて。お互いを思い、何もかもを与え合い、そして最高の思い出と仲間を残す。

お陰であたしがアタシになれた。一人じゃ何も出来ず、誰かと一緒であることに安心するだけで前進しなっかたあたしが、行動することに恐れず、自分の思い・意見・理想を持てるアタシになれた。

「恋をする度女の子は綺麗になる」と言う。ホントにそうだ。心の成長を促してくれるからじゃないかなって思う。アタシもモットモット恋をする。人であれ、仕事であれ。でもその根底で、いつまでもこの恋は終わらない。アタシらしくあたしで居る為に、それは必修条件。

だってアタシは「農大娘。」だから…。

みんなアリガト〜

タイでの一ヶ月間

三年　松本明子

昨年の夏、私はタイ・カセサート大学短期農業実習に参加しました。他文化に触れてみたかったことと、なによりこのプログラムにしかないバディ制に魅力を感じ応募しました。バディ制とは、タイの学生とペアになり行動するもので、会話はすべて英語であることなど不安も大きかったけれど、自分の英語力を試せる良い機会だと思いました。

講義・実習は、作物・熱帯果樹・園芸・畜産についてすべて英語で行われ、炎天下の中、電子辞書を片手に理解するのは本当に大変でした。しかし、優しく愉快な先生達の話に惹きこまれ講義に熱中し、積極的に取り組んだ後の達成感はやみつきになりました。他では味わうことのできない貴重な経験をしたことにより、何事にも挑戦する！という新しい自分の一面を発見することができました。

タイでの生活は、激辛料理、バイクの二〜五人乗りでの運転、カエルや昆虫のフライなど見たことのない食材の山積み販売、突然のスコールなど、初めての連続でした。中でもカメに溜まった雨水を、修行僧のように浴びて入るお風呂が一番衝撃的な体験でした。食あたりで寝込んだこともあったけど、講義・実習・観光と、一日があっという間に過ぎ、充実した毎日を送ることができました。

この旅での一番の収穫は、TUAチームとバディ達との出会いでした。バディ達とは上手くコミュニケーションがとれるか心配でしたが、パーティで飲んで歌って踊ったり、一緒に観光に行ったりと、すぐにうちとけ、言葉の壁を乗り越えて、冗談を言い合うほど仲良くなりました。タイ語の通訳、校内案内、買い物など本当にお世話になり、別れるのがつらかったです。TUAチームは、私にとって、仲間であるのはもちろん、親であり、兄弟であり、家族のような存在でした。このプログラムで出会ったたくさんの人たちに支えられ、慣れないタイでの生活を満喫することができ、心から感謝しています。

タイでの生活はまるで夢のようで、帰国した時は現実に引き戻される気分になりました。違う土地、違う言葉、違う生活、たくさんの人たちとの出会いの中で受けた刺激によって、これからの課題を見つけ出すことができました。このタイで過ごした一ヶ月間と同様に、この先ひとつでも多くのことに挑戦していきたいと思います。

大学生活

三年　山本美和

三年生になってもう九ヶ月が経つ。もうすぐ現四年生は卒業し、四月には新三年生が入室してくる。私達は、もうすぐ四年生になるのだ。時が経つのは本当に早いものだなあ、と思う。昨年ふじみのを寄稿させてもらった時、私は大学生活にあきあきしていた。ただ毎日授業に出て、学期末に試験を受けるだけに来ていた学校は、まるで予備校のようだった。だから研究室に所属したら少しでも大学生らしい生活ができるかもととても期待していたのを覚えている。そして今、私は家畜繁殖学研究室に入室し、毎日とても充実した、期待以上の大学生活を送っている。この通称“繁研”での私の大学生活について、今回お話ししたいと思う。

繁研に入室した私は、研究室という“団体”に所属できたことがうれしかった。それまでは大学にいてもどこにも落ち着いて過ごせるような所がなかったが、研究室に顔を出し、そこを中心にして授業や実験に出る。自分のロッカーもあるので便利だし、大学生として今自分が生活しているんだという自覚が持てるようになった。

研究室では実験動物がいて、その飼養管理全般を学生が自ら行う。私はシバヤギを担当する“やぎ班”になり、

当番制でいろいろな事を行っている。当番は二種類あり、普通当番で掃除・給餌を行い、管理当番で健康管理を行う。はじめのうちは四年生が三年生に付いて一緒に当番を行い、具体的なアドバイスをしてくれた。でも、この当番というものがとても大変で、体が慣れるまで結構きつかった気がする。普通当番は夏前に、管理当番は今年の年明けとともに四年生から三年生に完全に引き継がれた。今では自分達で考え、よりよい飼養管理の実践につとめている。まさに実学主義！といった風である。当番を通して、私は本当の意味で農大生になれたと感じている。

他にも研究室ではさまざまなことがある。シバヤギや他に飼育しているミニブタ、白色レグホーンなどの動物達を供試していろいろな実験が行われ、卒業論文など研究活動を行っている。私達ももうすぐ卒論にとりかかる時期となり、先輩方が行っている実験に付き様々なことを教わったり、文献等を調べて今はそのテーマ探しを行っている。

また、研究室で行うイベントや、日常生活をよりよく過ごすため、研究室という組織を運営していったりする幹部が存在する。この幹部を中心に、繁研では新入生歓迎会から卒業コンパまで、また収穫祭、卒業論文発表会などほぼすべての行事を企画し行っている。昨年秋、幹部も四年生から三年生へと代替わりして、今は研究室全体を三年生が中心となって行うようになった。私も幹部の一員となり毎日なんだか忙しい。でも、とてもやりがいがあるし、研究室へもより愛着がわいたと思う。

繁研に入って一番うれしいと思ったことは友人である。友達がいなかったわけではない。仲の良い友達もいたし、私の周りにはいいやつばかりいると思う。けれど、大学から約二時間のところから通学していることもあり、私はあまり大学によりつかなかった。ただ私は、ずっともっとお互い深く関わって、本音をぶつけ合える、心から気の許し合える、そんな友達関係を求めていた。繁研の中で、私は今、それをとてもいい感じで築くことができた。この大学に来て良かった、と心から言え、毎日が楽しいのは、何よりこれが大きいと思っている。

もうあとわずか一年ほどで私の大学生活は終わる。けれどこの一年が四年間で一番充実したものになりそうだ。三年生が入室してくるのを楽しみにしつつ、今の大学生活をもっともっとより良いものにしていきたい。

FIGHTINGRADISH！

二年　本間彩子

二年前の全学応援団入団式で私は農大チアリーダーズに出会った。体育館のステージに現れた10人ばかりのチアリーダー達はいっせいに「オーライ！カモーン！」そんなふうな言葉を言いながらステージの上をピョンピョン跳ねていた。私達一年生はどう反応してよいかわからずシーンとなっている。にもかかわらず、彼女達は「ゴー！」「農大ファイト！」と、体育館中にひびきわたる大きな声とせいいっぱいの笑顔で演技している。（元気いいなぁ）私は第一にそう思った。そしてあっという間に演技が終わってしまい、残念と思った時、また「オーライ！カモーン！」とピョンピョン跳ねながらステージのわきへと姿を消した。

入学してまだ数日しかたっていなかったあの頃、不安でいっぱいだった私は、彼女達の元気あふれる演技を見て何故だか不思議と元気がでた。最初いきなり「オーライ、カモーン」と登場した時は思わず（えっ？）と身をかまえてしまったけど演技が終わった後聞いた時はたのもしく思えた。高校時代、課外活動にあまり意欲を燃やせなかった私は彼女達の笑顔を見てこう勇気付けられた。「チアリーダーになる！そして大学生活を楽しみたい」彼女達にこう勇気付けられて私は農大チアリーダーズの一員になることができた。

私達のチーム名は「ファイティングラディッシュ」である。日本語に訳すと「戦え大根」いかにも農大らしい。私達は春は入団式、夏は大会、秋は収穫祭、冬も大会、と一年中忙しいが、なんと言っても収穫祭は一年の内で最も激しい体力勝負と言っても過言ではない。10月に入ると部室が24時間開放になるので家が遠いチームメートは歯ブラシなどのお泊りセットはもちろん毛布やホットプレートまで持ってきては部室に泊まる始末。ほぼ毎日部室には誰か泊まっている感じ。私も家が近いくせに泊まってしまった。そしてこの時期に必ずゴミ箱を埋めるものは中年お父さん方がよく飲む栄養ドリンク。あるチームメートなんて「ユンケルが一番効くのよ」なんてお父さん方よりも詳しいじゃないかと思うほど。実際どれほど効くのか知らないけれどぐいっと飲めば気合が入るのは本当。チアリーダーって一見華やかに見えるけど実は体力重要のスポーツなのだ。でも、一番大切なものって何？と聞かれたらやっぱり笑顔。ツライ練習あってこそ自然と笑顔になれる。あとはアピール。実は入団式のとき聞いた「オーライ、カモーン」はチアリーダーからみんなへのアピールだったのだ。一緒に応援して下さいという大切なこと。これからみなさんも私達「ファイティングラディッシュ」に会うことは何度かあるだろう。その時はぜひとも一緒に応援して欲しい。そしてあなたが元気になれたら私達は本当に嬉しい。

愛する仲間たち

一年　山田淳志

授業終了のチャイムが鳴った。開放された学生たちはそれぞれの午後を過ごすために次々と教室を後にする。その流れに混じっては僕いつもあの場所へあの仲間たちに会いに行く。学生会館のとある一室、そこに彼らはいる。今日もその扉を開けるとみんな笑顔で僕を迎えてくれた。

僕が初めてにこの扉を叩いたのは入学してすぐのことだった。はるか西、広島から来た僕はこれから始まるこ厚木での学園生活をどういったものにするか迷っていた。バイト、勉学、女、自分にとっての色々なテーマがここには用意されていたが、そこで僕が選んだ選択肢は『収穫祭』というものであった。今でもこの選択は間違っていなかったと断言できる。この収穫祭を通して出会えた仲間たちがその証だ。

収穫祭までの数ヶ月間、楽しかったこと、苦しかったこと、色々なことがあったが、そんな時にはいつも僕の周りには『収穫祭』という同じ目標を持つ仲間たちがいた。忙しくて辛い時でも『自分は一人じゃない』というその状況が僕を動かしてくれた。辛いはずの終夜作業でもこの仲間たちといると不思議と楽しくなっていた。

迎えた収穫祭当日、先輩たちは皆口をそろえて言っていた『収穫祭なんてアッと言う間に終わるよ』、その通りだった。数ヶ月間かけて準備してきたものがたったこの二日間で消え去っていった。意外にも達成感というものはあまりなかった、でもそれはもっと良いものが作れるという自信の表れだったのかもしれない。とはいえ、この収穫祭というものは予想以上に大きな財産を僕に残してくれた。

収穫祭が終わり何ヶ月か経った今でも、僕の居場所はこの部屋である。そして周りには大切な仲間たち。また今年も新しい収穫祭が動き出そうとしている。きっとそこには昨年とはまた違った新たな困難が僕たちを待ち受けているに違いない。たとえそれがどんなに辛いことであろうとも、この仲間たちが一緒にいてくれる限りそれを乗り越えて、また新しい感動にめぐり合えることが出来るに違いない。

愛する仲間たちへ、「楽しい収穫祭をありがとう、また今年も新しい後輩たちや先輩たちと一緒に最高の収穫祭を作り上げようよ！僕はみんなが大好きだ！」

畜友会だより

平成13年度畜友会事業報告

平成13年

7月10日	平成13年度畜友会定期総会
8月6日	1年生対象収穫祭説明会（於富士畜産農場）
10月11日	第2回厚木キャンパス収穫祭・第110回体育祭 畜産学科統一本部本部開き（於食堂・けやき）
11月2日	第2回厚木キャンパス収穫祭前夜祭参加
11月3日～4日	第2回厚木キャンパス収穫祭参加
11月5日	第110回体育祭参加（於世田谷キャンパス）
11月26日	第2回厚木キャンパス収穫祭・第110回体育祭 畜産学科統一本部慰労会（於食堂・けやき）

平成14年

3月20日	畜友会誌「ふじみの第38号」発行
3月21日	卒業祝賀会・卒業記念品贈呈（於厚木キャンパス）
4月下旬	新入生学外オリエンテーション参加
5月上旬	新入生歓迎会

平成12年度決算報告

（平成12年６月１日～平成13年５月31日）

一般会計の部

収入の部

科目		予算額（円）	決算額（円）	差額（円）	備考
会費	新入生	2,000,000	1,810,000	190,000	10,000×181
	編入生	60,000	65,000	△5,000	7,500×2 5,000×10
	過年度分	3,419,000	2,360,000	1,059,000	10,000×236
雑収入		0	40	△40	利息
当期収入合計（A）		5,479,000	4,235,040	1,243,960	
前期繰越収支差額		△37,618	△37,618	0	
収入合計（B）		5,441,382	4,197,422	1,243,960	

支出の部

科目	予算額（円）	決算額（円）	差額（円）	備考
収穫祭援助費	670,000	670,000	0	特別会計に繰り出し
ふじみの印刷費	400,000	378,500	21,500	
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	400,000	393,750	6,250	
	384,000	384,000	0	前年度未払い分
新入生歓迎会費	250,000	161,956	88,044	
消耗品費	100,000	30,086	69,914	
通信運搬費	50,000	54,121	△4,121	
雑費	100,000	38,555	61,445	
予備費	100,000	0	100,000	
当期支出合計（C）	2,654,000	2,310,968	343,032	
当期収支差額（A）－（C）	2,825,000	1,924,072	900,928	
次期繰越収支差額（B）－（C）	2,787,382	1,886,454	900,928	

上記のとおり報告する。
平成13年６月22日

畜友会会長　大谷　忠 ㊞

上記に相違ないことを認める。
平成13年６月21日

平成13年畜友会監査委員
古川　徳 ㊞　永山貴子 ㊞
松岡昭善 ㊞　三本松良子 ㊞

特別会計収支報告

（平成12年６月１日～平成13年５月31日）

第１回厚木キャンパス収穫祭、第109回世田谷キャンパス収穫祭

収入の部

科目	予算額（円）	決算額（円）	差額（円）
一般会計より	670,000	670,000	0
スポーツ大会残金繰り入れ	114,588	114,588	0
当期収入合計（A）	784,588	784,588	0
前期繰越収支差額	239,774	239,774	0
収入合計（B）	1,024,362	1,024,362	0

支出の部

科目	予算額（円）	決算額（円）	差額（円）
統一本部	350,000	329,930	20,070
前夜祭・特別企画	50,000	49,955	45
体育祭	70,000	63,582	6,418
宣伝隊	150,000	141,676	8,324
北門装飾・研究棟アート	50,000	0	50,000
家畜苑	150,000	144,952	5,048
予備費	45,000	0	45,000
当期支出合計(C)	865,000	730,095	134,905
当期収支差額(A)－(C)	△80,412	54,493	25,919
次期繰越収支差額(B)－(C)	159,362	294,267	△24,457

上記に相違ないことを認める。
平成13年６月21日

平成13年畜友会監査委員
古川　徳 ㊞　永山貴子 ㊞
松岡昭善 ㊞　三本松良子 ㊞

平成13年度畜友会予算

（平成13年６月１日～平成14年５月31日）

一般会計予算

収入の部

科目		予算額（円）	前年度予算額(円)	差額（円）	備考
会費	新入生	2,000,000	2,000,000	0	
	編入生	30,000	60,000	△30,000	5,000×6人
	過年度分	1,160,000	3,419,000	△2,259,000	※1)
雑収入		0	0	0	
当期収入合計(A)		3,190,000	5,479,000	△2,289,000	
前期繰越収支差額		1,886,454	△37,618	1,848,836	
収入合計(B)		5,076,454	5,441,382	△364,928	

※１）１年生　10,000円×42人
　　２年生　10,000円×30人
　　３年生　10,000円×26人
　　４年生　10,000円×18人

支出の部

科目	予算額（円）	前年度予算額(円)	差額（円）	備考
収穫祭援助費	760,000	670,000	90,000	
ふじみの印刷費	430,000	400,000	30,000	※2)
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	450,000	784,000 ※3)	△334,000	
新入生歓迎会費	200,000	250,000	△50,000	
消耗品費	50,000	100,000	△50,000	
通信運搬費	150,000	50,000	100,000	※4)
雑費	70,000	100,000	△30,000	
予備費	230,000	100,000	130,000	
当期支出合計（C）	2,540,000	2,654,000	△114,000	
当期収支差額(A)－(C)	650,000	2,825,000	△2,175,000	
次期繰越収支差額(B)－(C)	2,536,454	2,787,382	△250,928	

※２）「ふじみの」を新入生保護者に送るため200部増刷
※３）平成11年度384,000円＋平成12年度393,750円の支払い分
※４）新入生保護者に「ふじみの」を送るための送料（50600円）が必要であるため

特別会計予算

（平成13年６月１日～平成14年５月31日）

第２回厚木キャンパス収穫祭・第110回世田谷キャンパス収穫祭

収入の部

科目	予算額（円）	前年度予算額(円)	差額（円）
一般会計より	760,000	784,588 ※1)	△24,588
当期収入合計(A)	760,000	784,588	△24,588
前期繰越収支差額	294,267	239,774	54,493
収入合計(B)	1,054,267	1,024,362	29,905

※１）スポーツ大会残金114,588円を含む

支出の部

科目	予算額（円）	前年度予算額(円)	差額（円）
統一本部	350,000	350,000	0
前夜祭・特別企画	50,000	50,000	0
体育祭	70,000	70,000	0
宣伝隊	200,000	150,000	50,000
研究棟アート	50,000	50,000	0
家畜苑	150,000	150,000	0
予備費	45,000	45,000	0
当期支出合計(C)	915,000	865,000	△50,000
当期収支差額(A)－(C)	△155,000	△80,412	△74,588
次期繰越収支差額(B)－(C)	139,267	159,362	△20,095

平成12年度決算報告において、平成12年度新入生分の会費（2,150,000円）の記入漏れのため、平成12年度決算報告、一般会計の部の会費過年度分、当期収入合計、収入合計、当期収支差額、次期繰越収支差額の予算額・差額が総会時より前記のように変更になります。

それに伴い、平成13年度畜友会予算・一般会計予算の会費・新入生、過年度分の前年予算額・差額が右記のように変更になります。

平成14年１月22日

古川　徳　　永山貴子
松岡昭善　　三本松良子

平成13年度畜友会役員

（平成13年６月１日～平成14年５月31日）

役職	氏名	研究室
会長	大谷　忠	家畜学研究室
副会長	栗原良雄	家畜飼養学研究室
副会長	渡邊忠男	家畜衛生学研究室

委員長	3年　関　克史	家畜繁殖学研究室
副委員長	3年　立川悠々	家畜育種学研究室
	2年　市川方啓	
書記	3年　柴田彩子	家畜衛生学研究室
	2年　宮崎美帆	
会計	3年　正木美舟	野生動物学研究室
	2年　駒板明海	
渉外	3年　吉田博幸	家畜育種学研究室
	2年　佐伯勇一	
企画	3年　五味澤健作	家畜学研究室
	2年　横川暁士	
庶務	3年　須藤稔太	家畜生理学研究室
	2年　酒井孝徳	
編集	3年　宮國科子	畜産物利用学研究室
	2年　富田裕子	
監事	古川　徳	畜産物利用学研究室
	松岡昭善	畜産物利用学研究室
	3年　三本松良子	家畜育種学研究室
	2年　桐生茂昌	

第二回厚木キャンパス収穫祭・第一一〇回体育祭 事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第2回厚木キャンパス収穫祭での活動内容としては、収穫祭宣伝活動、特別企画、研究棟アート、櫓装飾、家畜苑、体育祭を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）は先生方や第二回収穫祭実行委員会、農学科統一本部と連携を取り、また、畜産学科統一本部各部門の委員長との橋渡し的な存在として全体を統括しています。

今年は厚木キャンパス、世田谷キャンパス同日開催にともない、厚木のみの参加となり、先の見えぬ事もありましたが、皆様のご協力のもと収穫祭を無事成功させることができました。来年は、今回の経験を生かし皆様とさらに良いものを作り上げていこうと思っております。

特別企画

早くも、四月から会議に会議を重ね、学生だけでなく来客者にも参加してもらえるようなステージを企画・運営しました。厚木は農学科と畜産学科の二学科のみなので、他の部所からの協力を得ながら活動しました。

今年は厚木キャンパスでは初の前夜祭を行いましたが、十月上旬から練習してきたソーラン節などを踊り、大変の盛り上がりを見せました。また、収穫祭ではステージ付近の人々を巻き込んで踊った『Dance×3 2001』や知力・体力を競った『ドンドンドン』、本場北海道・オホーツクキャンパスの学生に来てもらい、皆で踊った『YOSAKOIソーラン』、アロエをテーマにした『プチ講座』、最高のカップルを決めた『ザ・ベストカップル』、定番の『美人コンテスト♂』等もとても盛り上がりました。

宣伝隊

農大農学部が厚木に移転してきてまだ日が浅いということで、多くの方に「農大、厚木にあり。」ということを知ってもらうため、数多くの宣伝活動をしました。

その起点として、八月四日に厚木で行われた鮎まつりDANBEパレードに参加しました。ここでは見事、最優秀賞を獲得しました。

また、九月中旬から、経堂の農大通りで行う経堂パレードに参加するための神輿を作り始めました。畜産学科は他学科とは異なり、毎年、木造の神輿を作っています。

九月末から十月には休日を利用し、本厚木、海老名、その他複数の駅、又、厚木市内公園、厚木市商工観光まつり等で宣伝活動を行いました。活動内容としてはビラ配布、植物の種・花・野菜の無料配布、全學応援団によるリーダー公開等をしました。学内においても、円陣青山ほとりを踊り、学生へ向けて収穫祭の参加の呼び掛けをしました。

収穫祭当日には、ステージ前において農大名物である野菜の無料配布を行い、多くの来客者に喜んで頂きました。

体育祭

体育祭では、毎年世田谷で各学科対抗の応援合戦を行っている。畜産学科では伝統の、空手の動きを取り入れた舞を行う。

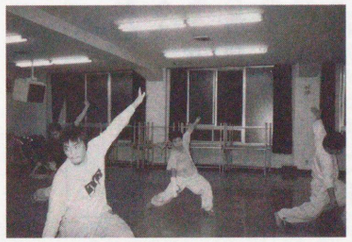
八月中旬から、この応援合戦の舞製作活動に入る。過去にあった舞を参考に取り入れ、完璧に良いと思うものが出来るよう作り上げていく。

九月下旬頃には参加者を募集し、練習を始める。団長を中心に、副団、団員という形で夕方から深夜にかけて練習し、皆で意見を出し合いながら、より完成度の高い舞を新たに作り上げていく。

十月下旬から全体を通しての練習が始まる。舞には一番華やかで感激するといわれている「流し」という動きがあり、これを完璧にするにはとても難しく、全員が協力し合い、一体となる必要がある。

十一月五日、本番。一ヶ月間練習してきた成果を全力に出し、気持ち、腕前、体を一統にして畜産学科にしかできない舞を披露する。本番終了後は、歓喜し涙を流す者もいた。

今年も多くの観客を感動させたに違いない。



櫓装飾

「櫓」とは、体育祭最中に各学科の競技参加者待機所、または応援席として機能し、いわゆる陣地みたいなものです。高さ約5M×幅約9M×奥行き約3Mの高台で、櫓には、学科のカラーを表した絵を描きます。

九月中旬から絵の図案を考え、下書きを基に櫓自体に描いていきました。

研究棟アート

厚木キャンパスの中で一番高い建物である研究棟の壁を、来客者や自分たちが楽しい気分になれるように装飾するのがこの部門の仕事です。

九月下旬から準備を始め、遠くからも見えるようにと考え、縦14M×横29Mの大きな絵を、布を切り貼りして装飾しました。

また、色々なイベントが行われるステージや模擬店からよく見える食堂屋根にも風船などを使って装飾しました。

家畜苑

今年の家畜苑は厚木キャンパスでの二回目の収穫祭ということもあり、少し慣れている分、バージョンアップをはかりたいと思い、子供向けのミニ動物園を追加しました。動物では水牛・ホルスタイン・黒毛和種・豚・リャマ・家禽・ダチョウ、ミニ動物園の方では、ふれあいが出来るように、子山羊・羊・ウサギ・ヒヨコなどを用意しました。

今年は場所もバス停前になったこともあり、お客さんも沢山来てくれ大盛況でした。中でも、ヒヨコの羽化の様子を見せるBOXの前は普段見ることが出来ないためか、お客さんが絶えることがありませんでした。

【結果報告】

宣伝隊
農大通り賞……3位

体育祭
総合順位……5位
競技の部……5位
櫓装飾の部……9位
応援の部……5位

東京農業大学農学部畜産学科
“畜友会”会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発行
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。

(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員並びに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。

(1)会　　長　1名
(2)副　会　長　2名
(3)執行委員
委　員　長　1名
副委員長　2名
書　　記　2名
会　　計　2名
歩　　外　2名
企　　画　2名
庶　　務　2名
編　　集　2名
監　　事　4名

第七条(1)会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。

(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条(1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条 役員および連絡委員の選出および任期
(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。
(2)新執行委員会は、現執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、他の1名を2年次生より選出するものとする。
尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。
(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。
(4)連絡委員は、各学科〔1、2年次〕および各研究室〔3、4年次〕で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

第十条(1)総会は定期総会と臨時総会とする。
(2)総会は正会員および特別会員をもって構成され、本会の最高意思決定機関とする。
(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。
(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条 総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条(1)総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。
(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。
委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員数の五分の一を上限とする。
(3)委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条 定期総会は次の事項を決議する。
①前年度の事業報告および収支決算報告
②次年度の役員
③次年度の事業計画および収支予算

④会則の改正
⑤その他

第十四条 総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条 議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条 総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条 総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八条(1)第六条(3)の執行委員は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。
(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条 執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が務め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条 執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条 執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文章で必ず報告する。

第二十二条 連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。
(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。
(2)連絡委員会は次の事項を処理する。
①執行委員会で決定した事項の伝達。
②一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。
(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席する事ができる。

第二十三条 本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章 会計

第二十四条 本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以てこれにあてる。
但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条(1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括

して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。
但し、一度納入した会費は返金しない。
しかし、入学取消しの場合はその限りではない。
(2)会費は会長および委員長連名で毎年3月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条(1)第4条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。
(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。
(3)編集委員会の責任者は編集委員の内1名が担当する。
(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条(1)第4条(5)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。
(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。
尚、内規は別に定める。
(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。
尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを施行する。

各部門委員長より

らしく

統一本部委員長
三年　関　克史

「関、お前副統（副統一委員長）やってくれるか？」
昨年の統一本部委員長　登健太先輩から一年のとき言われた言葉だった。俺はすぐに「はい！」と言う言葉が出なかった・・・。
ここで俺の歩んできた道のりを少し書かせていただくことにする。
実家は新潟県の山古志村という人口約二千四百人の小さな村の中にある。小学校は全校生徒十数名、中学校も九十名ほどで大自然に囲まれ育って来た。高校は全寮制の農業高校に進み、これまで数多くの素晴らしい先生方、仲間達に出会ってきた。そして中学時代、生徒会長をやらせていただいたのも高校時代、生徒会活動やボクシングで日本一になれたのも周囲の多くの人の協力があり、今思い出しても“感謝”の一言に尽きる。これまで普通の学生生活では体験できないようなことを沢山してこれたことは自分の自信であり、誇りである。
そして大学生活でも・・・
「畜産学科統一本部」
これもまた素晴らしい出会いの一つである。
入学式当日、高校時代の先輩に連れられ統一本部の部屋にお邪魔した。その頃は世田谷に統一本部があり収穫祭も世田谷で行われた。
「楽しそうだし、ここだったら何かありそうだな。」そんな思いで先輩と一緒に収穫祭まで厚木、世田谷間を毎日往復し、夜遅くまで作業や体育祭の応援練習をした。眠くて眠くて布団が恋しかったが、一、二、三年生が同じ釜の飯を食い、一つのことに向かって夢中で頑張る。中学、高校と部活をしてきた私がそういうことが嫌いな訳がない。確かに部活と違った面は多かったがそれもまた勉強。大学に入っていなければ一生縁のなかったこと、そして先輩、仲間たちと色んなことを語りあえるのが今になって、もの凄く自分のためになっているんだと感じる。
時日は経ち、怒涛の第一〇八回収穫祭が終わった。
この時、初めに書いた言葉を言われた訳である。その時戸惑ったのは俺が副統としてみんなを引っ張って行けるか正直不安で仕方なかった。今だからここで言えることだが一年間統一本部で活動してきて“伝統”の重さというものが何とも言えない程のしかかってきた。「・・・少し考えさせてください。」何とも恥ずかしい話だがその時はそうとしか言えなかった。その後みんなの後押しもあり、副統をさせていただくこととなった。
二年目の収穫祭、第一〇九回収穫祭（世田谷キャンパス）と第1回厚木キャンパス収穫祭（厚木キャンパス）

が行われた。あっちこっちにてんてこまいで、あっと言う間に時が過ぎていった。結果を見れば体育祭を始め賞もいくつかいただいたのであるが、内容的には満足いかなかった。

そして、統一委員長としての収穫祭。世田谷、厚木同日開催の新しい収穫祭。プレッシャーもあったが、いざ始めると毎日楽しめながら作業なり練習なりできた。楽しむというのは、だらけているというのではなく、形としてできていくことを楽しむということで、今年は団結力があった。結果は去年より劣るものであったが、内容の濃い、私の考える統一本部としての在り方として満足いっている。

そしてここまでやってこれたのも周りのみんながいてくれたから、先生方、職員の方々の御協力があったからこそ第2回厚木キャンパス収穫祭を大成功に終了することができたわけで感謝すると共に来年へ向けて、委員長の市川を先頭に更なる盛り上がりを見せてほしいと思う。統一本部はこれからどんどん変わって行く時期にある。今までのやり方にとらわれずにやってほしい。でも、仲間の大切さや、感謝の気持ちはいつまで経っても一人一人が感じれるところであってほしい。

今年は自分でも予想外の骨折というハプニングもあり、みんなにはお世話になった。ありがとう。いろいろあった収穫祭も無事幕を閉じ、3年生は引退となった・・・。一緒にやった仲間として一生忘れない、最高のやつらだな。

バラバラになっちゃうけど絆はいつまでも切れることはない……

また集まって馬鹿やろうぜ！

エンターテイメント

特別企画委員長
三年　林　洋子

問1.「とっき」を正しい漢字で書いたものを以下から選べ。
一、突起　二、特記　三、特企　四、特機

「物事を考える時には最低3つの見方がある。1．作る側の視点（どういうものを作りたいのか）、2．出演する側の視点（どういう風ならやりやすいのか）、3．お客さんの視点（どういうものが見たいのか）。」こんな話を聞いた。この言葉はそれ以降の私の考え方を大きく変えた。私はいつも一方向からしか物事を見たことがなかった。しかし、この言葉を聞いてからは最低でも3つの視点から物事を見るように心がけた。

私が特別企画と出会ったのは畜友会に入って約半年、9月頃で、確か、青空教室に出演したことがきっかけだったと思う。「青空教室」というのは各学科の1年生が1名ずつと、特企の先輩方で構成する、劇やクイズ、配布などをしてあるテーマを説明するという企画だった・・・と思う。

慰労会の終わり頃、酔っ払いながら一緒に劇をやったみんな（1年）で「来年は絶対『特企』やろうね！」と約束したのを覚えてる。

二年になってどの部門につくかという時、私は迷わず特企を選んだ（ったっけ?）。この年は厚木でも収穫祭をやることが決まったので、厚木・世田谷両キャンパスのステージ企画を行った。分からないことばかりで何もできなかったのに、明さんと京さんは最後まで怒らずに色々教えてくれた。他学科に何でも相談できる友達ができた。世田谷会議の後、デニーズで夜中まで色々話したのを覚えている。今でも何かあるとよく相談している。

三年になって、厚木―世田谷両キャンパスの同日開催で世田谷のみんなと一緒に企画を作ることができなくなったけど、資料や相談に乗ってくれるなど、色々助けてくれた。今年は厚木にしかできないものを作ろうと思った。例えば、音響や照明はプロの人がやってくれるので、早速無理なお願いをした。ここでバックライトを使いたいとか煙出してくださいとか。それなのに、大体すべて叶えてくれた。

私が担当したのはミスコン、プチ講座、ザ・ベストカップルなどで、その他の企画にも参加した。何より覚えているのは、一発目の企画、DANCE×3　2001のNEWｍサコイの練習かもしれない。どうしてもできない個所があって、夜中なのに総務の後輩が何度も教えてくれた。畜友会のみんなと農学のみんな、総務のみんな、お客さんも巻き込んでのステージで踊ったとき、爽快だった。

これから収穫祭を創る後輩たちへ…みんなならきっと私たちが創ったのよりすごいのが出来る！そう信じてる

よ。何も教えてあげられなかったけど、みんなにはたくさんの事を教えてもらった気がします。

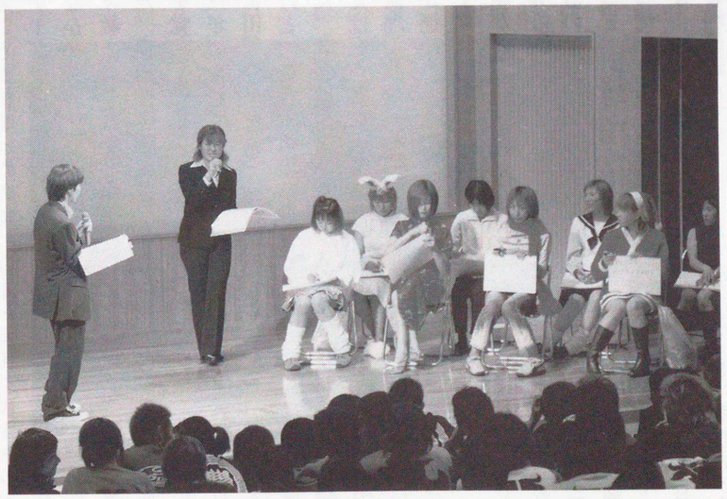
まきへ…まきはきっとこれからすごく大変になると思う。つらくてやめたくなる時が来るかも知れない。だけど、あきらめないで最後まで特別企画をやって欲しい。1年生であれだけのこと出来たんだ。まだまだ可能性を秘めていると思います。もしも助けが必要になったらいつでも呼んでください。出来る限り協力するよ！

先輩方へ…最後の最後まで助けてくださって本当に感謝しています。先輩方がいなかったらここまで頑張れなかったかも知れません。計画性がなく、いつもわがままだったのに、最後まで見捨てずに手伝ってくださったこと忘れません。明さん・京さん、大好きです!!

畜友会のみんなへ…最高の仲間だと思っています。みんなに出会えて本当に良かった。

これからもどうぞよろしく。

答え：特企（ちなみにとっきと打っても出ません）



ミスコン風景

みんなあっての「宣伝隊」

宣伝隊隊長
三年　正木美舟

宣伝隊は、15学科統一本部の学科宣伝隊数名が集まって構成されている団体だ。総勢約50名、各地で収穫祭の宣伝活動を行っていくうちに、学科を越えて、かけがえのない友人になる。

平日は会議、週末は宣伝活動……。皆で集まっていない時も、通行人の迷惑にならない様に活動するには…、より効果のある宣伝を行うには…と、心の休まらない日々が続いた。そんな日々でも、毎日が楽しかった。それは、いつも宣伝隊の仲間と一緒だったから。

私は宣伝隊の一人として活動して、様々な事を得た。「宣伝」だけに笑顔はもちろん、綿密な計画を立てる事、一人一人が各自の役割をきちんと把握しておく事の大切さ、その場の状況を見て、それに応じた判断を下す事、そして後から省みる事の重要性。こんな事をこんな短期間で学べるのは、きっと宣伝隊だけ。だから私は宣伝隊がスキ。ここで学んだ事は、これから先、絶対に役に立つ事ばかりだと思う。

農大では、他学科聴講でも単位を取得できる。でも友達がいなくてはおもしろくない。友達を作っても、講義が終わると疎遠になる。それではもったいないと思う。一つや二つくらい、世田谷の友達と一緒に活動できる団体があっても良いと思う。その一つが宣伝隊。宣伝隊では各学科に必ず友人ができる。ますます世田谷に行くのが楽しみになること間違いなし。かなりオススメの部門です!!

今年度、副隊長を務めてくれたトミ、行き届かない先輩でごめんね。私は、昨年、自分が楽しませてもらったみたいに、トミが楽しめているか、いつも不安でした。そんな不安をよそに、宣伝活動の回を重ねる度に成長する、頼もしい後輩でした。来年は知恵ちゃんと佐伯兄さん、そしてユースケ、マキと一緒に、新しい事にも挑戦して、活動を楽しんでね。

2年間神輿隊長を務めてくれた稔太、次期隊長の佐伯クン、素晴らしい神輿をありがとう。厚木と世田谷であったり、規制があったりと困難もあったけど、いつも最善を尽してくれたよね。忙しくて、一番やりたかった神輿作りにも、携わることができなかった。そんな私を知ってか知らずか、ちょこっと仕事をくれた事、とても嬉しかった。ありがとう。

私の最愛の先輩である、ナオさん、多大なる御協力と小さなイタズラをありがとうございました。カナリ楽しかったデス。

最後に、暴走する厚木宣伝隊を力強く支え、見守って

下さった常さん、本当にありがとうございました。
厚木と世田谷と、移動の多かった宣伝隊。大変な事も多かったけど、楽しかった。やって良かった。宣伝隊で良かった。
でも、こんなに楽しくできたのは、他の部門のみんながいたからだった。私が他の部門の手伝いができなくても、中途半端な手伝い方しかできなくても、みんなは理解してくれた。それどころか、私達宣伝隊を気使い、収穫祭中には、忙しい中大勢が手伝ってくれた。ありがとう。心から感謝しています。
みんなと一緒に、収穫祭・3年間を過ごすことができて、本当に良かった。ありがとう。
みんな、大好きだよ！

厚木宣伝隊　いい仲間♡

世田谷の宣伝隊と一緒に
鮎まつり

楽しいお神輿作り

神輿隊長
三年　須藤稔太

押忍。私、本年度畜産学科統一本部宣伝隊神輿隊長を務めました、須藤稔太と申します。前年度も、神輿隊長を務めましたが、前年度に比べて、今年は思いのほか順調に仕上がって、完成度も上がり、農大通り賞第三位と言う成績を残すことができました。本当に、神輿に携わってくれた人に感謝したいと思います。特に、副隊長として、補佐をしてくれた佐伯には、ほんとに感謝しています。来年も、この調子で、よりいい神輿を作って欲しいと思っています。そして研究室の方々にも迷惑をおかけしたと思います。
しかし、作業が順調に進んだといってもいろいろな苦労がありました。特に、屋根の部分は、去年と同様本当に苦労しました。本物の神輿らしく屋根を曲げることにしたのですが、この曲げるという作業が思いのほか難しくいろいろな試行錯誤を繰り返しながらやっとの思いで作り上げることができました。神輿完成式では、みんなが深夜二時を回っているにもかかわらず、来てくれた事が、本当に嬉しかったです。ほんとにみんなありがとう。
経堂パレードでも、重い神輿を担いでくれてつらかったと思います。終わった後も、『楽しかった。また来年も担ぎたい』など、嬉しい言葉をかけてもらい、隊長をしていて本当によかったと思っています。十一月五日に行ったファイヤーストームでの神輿投入では、投入したあとの神輿がめらめらと燃えていく様子に、ものすごい感動がありました。本音を言えば、来年もやりたいのですが、そういうわけにもいかず、我慢するしかないのが少し寂しいです。
最後にもう一度。神輿に携わってくれたすべての方々、

神輿投入!!

お神輿作り

愚痴と反省

体育祭委員長
三年　吉田博幸

「押忍、自己紹介させて頂きます。自分、私立東京農業大学第三高等学校出身、東京農業大学農友会、第一一〇回収穫祭・第2回厚木キャンパス収穫祭、畜産学科統一本部、本年度体育祭委員長を務めさせて頂きました、3年吉田博幸です。以後よろしくお願いいたします。」
これは15学科統一本部の中で使われている自己紹介の仕方である。この自己紹介を1年の時に、先輩に教えられた時の率直な感想は「はっ!?何言ってんの?」もしかしてヤバイ所に入ってしまったんではないかと思った。元々私自身はこういうノリがあまり好きではなかった。高校時代柔道部に在籍し、来る日も来る日も部活にあけくれていたのでハッキリ言って遊ぶ暇などなかった。文化祭の時も、体育祭の時も、部活があったので楽しかった記憶はほとんどない。だから遊んでいる人間が嫌いでもあり、うらやましくもあり、大学に行ったら遊びまくってやると心に決めていたのだが、現実は甘くなかった。
1年の時に飲み会で収穫祭をやってみないかと誘われ酔った勢いもあり、「やります」と言ってしまった。最初はたかが学園祭の準備と軽く考えていたが始まってみるとこれが

ツライの何の。平均睡眠時間およそ3時間。それでもまだ若かった私達は作業が終われば酒を飲みに行ったり、朝までしゃべっていたりと勝手に自分達で疲れを増やし、授業は爆睡、電車に乗れば終点まで連れさられ、もちろんバイトをする余裕などなく、日に日にやつれていく日々。応援練習では喉がつぶれ声がでなくなり、電話で親に「アンタ誰?」と言われた事もある。無茶苦茶なスケジュールだったと自分でも思う。

さて、ここまで愚痴ばかりを書いてしまったが私はこの3年間が楽しくてしょうがなかった。収穫祭の準備の中でも特に体育祭に力を入れてきた私は、3年目の今年、体育祭委員長を任されることになった。畜産学科の体育祭は昨年、一昨年と総合優勝になっており、当然今年も周囲からは優勝を期待されていたため、プレッシャーに押しつぶされてしまいそうだった。その為周りの人間にはずい分迷惑をかけてしまった。応援練習は3年間で一番練習した。よく1、2年生は音を上げずについてきてくれたと感謝してるし、結果として5位にしかなれなかったことを申し訳無くも思ってた。それなのに私達3年の引退式で1、2年が涙を流してくれたことがとてもうれしかった。いい仲間と後輩に囲まれて幸せな3年間だった。

櫓装飾

櫓装飾委員長
三年　大林通子

昨年から櫓装飾という部門を担当して、今年は、委員長という立場から櫓装飾を担当しました。これまで先輩が築き上げてきた功績を自分が引き継いでいくことに大きなプレッシャーを感じ、最後までやり遂げられるかという不安でいっぱいでした。何せ、幅9メートル、高さ5メートルのパネルに巨大な絵を描くのですから。

締めきりを気にしながらで、一人で作業することが多く、終わりの見えない作業に戸惑い、苛立つ日々が続きました。本当に辛かった、寂しかった。でも、みんなの頑張っている姿を見ると、自分は一人じゃない!もっと頑張ろう!という気持ちにさせてくれました。

成績の方は、残念ながら昨年よりも順位を下げてしまう結果になり、悔しい気持ちでした。しかし、今回は結果そのものよりも、多くの仲間たちに支えられ、最後まで作り上げることができたことに満足感がありました。そして、自分にとって大きな自信にもなりました。

辛いこともあったけれど、それ以上に嬉しいこともたくさんありました。今年一年、本当に面白く、楽しい日々を過ごせました。

この三年間、先輩方や同僚、後輩をはじめ数多くの人々に出会い、励まされ、支えられてきました。そのおかげで、自分がここまで来れたことに心から感謝します。

頼もしい後輩たちには、来年ももっといい櫓をみんなで作ってほしいと思います。きっと、いいものができるはず!期待しています。頑張ってね!

最後に、三年間、部活を共にした同僚達に、感謝します。みんなに出会えて、本当によかった。共に喜び、共に笑い、共に闘い、共に涙をながした日々は、生涯忘れません。

本当にありがとう。
みんな大好きです!

“竜驤虎視!!”

宝物

研究棟アート委員長
三年　八木真友美

「縦14メートル×横29メートル」

これが私達の今年の装飾の大きさでした。といっただけでは何のことだかよくわからないと思いますが、簡単に説明すると、研究棟の6階部分から4階部分の壁に吊るした「布を使って描いた絵」の大きさのことです。一昨年までは、世田谷キャンパスの北門を装飾してきたのですが、昨年は、厚木・世田谷両キャンパスの装飾を任され、今年からは厚木キャンパスの装飾だけに専念することになりました。それに伴い昨年装飾した研究棟の壁とは違った面の壁を装飾することになり、全く前例のないところで、どうしたらいいのか迷い、先が見えずに不安で押しつぶされそうになることもありました。しかしそんな迷いや不安もいつも傍にいてくれた先輩や後輩、そして3年間一緒にやってきた同学年の仲間たちに支えられながら乗り越えることができました。(特に、麗子、柴っち、いっぱいわがまま言ったけどずっと傍にいてくれてありがとう。今年、一緒に装飾できて本当に、本当によかったです。)

本祭当日、丸一日かけて設置した装飾が雨で壊れてし

まい、撤去しなければならなくなったときは、正直想像以上の出来事に目の前が真っ暗になり、悔しくて悲しくて涙が溢れてきました。2ヶ月近くこの2日間のために頑張ってきたのに・・・。

だけど気付きました。布で描いた絵は消えてしまったけれど、みんなで一緒に頑張った時間が心の中にあることに。私にとって仲間と一緒に過ごしたこの時間は一生の宝物です。こんな想いを抱かせてくれた仲間に感謝します。

こんな私を研究棟アート委員長として認めてくれてありがとう。

わけの解らないまま一緒に頑張ってくれた装飾ギャルズ、ありがとう。

それぞれの部門も忙しいなか、設置をはじめとしてペンキ塗り・布貼り・買い出しを手伝ってくれた他の部門の人たち、みんなありがとう。

みんな、みんな大好きです。

後輩のみんな、来年、「3年間で一番楽しかった」と自信を持って言えるくらい、とにかくおもいっきり収穫祭を楽しんでください。徹夜続きで疲れているけど楽しそうにしているみんなの笑顔を期待しています。(美帆、明海、まだ部門として仕事が確立していないから大変だろうけど、持ち前の明るさと、そのキャラでうまく創り上げていってね。私もいつでも力になるよ!期待しています。がんばってね!!)

最後になりましたが、顧問を引き受けてくださった荻原国威先生を始めとする先生方、林二美次さんを始めとする職員の方々、各研究室の先生方、室員の方々そして研究棟アートに携わった全ての方々、本当にありがとうございました。来年もご迷惑をお掛けするとは思いますが、その時はどうぞ宜しくお願い致します。

研究棟アート全景!!

下から見上げると…

家畜苑について

家畜苑委員長
三年　立　川　悠　々

家畜苑とは、収穫祭において来場される一般の方に家畜とふれあってもらい、畜産を理解していただくための、家畜だけの動物園です。ですから、家畜苑において、メインとなるものは家畜です。

来場者の方達も、牛・豚・家禽などの家畜を見て喜んだり驚いたりします。僕達も来場者の方に喜んでもらえるように一ヶ月以上学校に泊り込みで作業をします。

しかし、その一ヶ月以上の準備期間と収穫祭本番の二日間を合わせた期間の中で実際に家畜がいるのは、たったの五日間だけなのです。つまり、僕達は、家畜の世話をする仕事の何倍の時間も家畜を飼うための準備に当てているのです。

鋼管を組んで畜舎を建てる事から始まり、アーチ作り、道具庫作り、家畜の後ろにあるバックボードの絵を描く事など、もっと細かい作業まで書き出すときりがないくらいにたくさんあります。しかも、これらの作業をみんなそれぞれ、こだわりを持って行うので最後の一週間ぐらいになると、ほとんど徹夜になります。

しかし、いざ本番となり、それぞれの畜舎に家畜が入ると、もうしっかり家畜苑は家畜の晴れ舞台となってしまい、今まで僕達ががんばって作ってきた物は、影が薄くなってしまいます。一ミリ単位で木を切って作ったものの、ほんの少しの色の違いなどで描き直した絵など、来場者の方には、そんな細かい所まで分かりません。やはり家畜を見ているからです。

それでも、そんな事が解っていても家畜苑のメンバーは一ヶ月以上もの間、へとへとになりながらも、眠い目をこすりながらがんばりました。もしかしたら多少手を抜いても気づかれなかったかもしれません。でも、もちろん手抜きはしませんでした。来場者の方達により楽しく、より解りやすく畜産の事を理解してもらえるように、家畜を見ている人達の喜んでいる姿を想像しながらがんばりました。

今年、家畜苑は場所が目立つ所に移動した事もあり大盛況でした。厚木収穫祭のメインと言っても過言ではないと思います。そして、この大盛況の理由は、右に長々と書いてある家畜苑メンバー一人一人のがんばりなのです。

僕は今年の収穫祭で家畜苑の学生責任者を務めたのですが、後輩、同輩のおかげでどうにかやってこれたのだと思います。メンバーのみんなに本当に感謝しています。

最後になりましたが、顧問の近江先生、佐藤先生、吉田先生をはじめとする先生方、家畜を借して下さった各研究室のみなさん、ありがとうございました。また来年以降も家畜苑をよろしくお願いします。

ちびっこ動物園

大盛況だった家畜苑

編集後記

「ふじみの」も今年で第三十八号を無事発行することが出来ました。

昨年度より学科移転しましたが、本年度は純厚木キャンパスの卒業生を送り出すことが出来ました。収穫祭・卒業式を厚木で行うことで、世田谷キャンパスとは離れてしまいますが、独自の雰囲気を作りつつあります。この「ふじみの」が、これからの厚木キャンパスの発展に伴い、その時代を映し出す鏡となれば幸いです。

最後になりましたが、この一冊を発行するにあたりお忙しい中原稿を書いて頂いた先生方、並びに会員の方々には、心より厚く御礼申し上げます。

編集委員長　宮　國　科　子

平成14年3月20日　発行

“ふじみの”第38号

編集委員　宮　國　科　子
　　富　田　裕　子
発行者　畜　友　会

発行者　東京農業大学畜友会
神奈川県厚木市船子1737
電話　046（270）6228

印刷所　株式会社　マイクロ印刷
東京都新宿区改代町16
電話　03（5261）1001